国 際 セ ン タ ー 年 報

第２０号

平成 26・27 年度(2014・2015 年度)

大阪教育大学国際センター

目　次

第一部　寄　稿

巻頭言 ……伊藤敏雄 ……1
（平成 26 年度　国際センター長）

就任挨拶 ……高橋登 ……3
（平成 27 年度　国際センター長）

台湾における数学学会の交流 ……城地　茂 ……4
（国際センター　国際事業部門）

ドイツ語学研修報告
－芸術家と出会うフィールドワーク－ ……赤木　登代 ……10
（国際センター　国際事業部門）

スイスの大学と国際化 ……中山　あおい ……14
（国際センター　国際教育部門）

第二部　学生便り

留学生の声

大阪教育大学で学んだこと ……鄒　震 ……19
（教養学科情報科学専攻、中国）

であい ……チャン・ティ・キュ・ミー ……20
（日本語日本文化研修留学生、ベトナム）

留学の恩恵 ……オレリ・ゴンザレス ……22
（交換留学生、フランス）

日本での１年半 ……イ・ミナ ……25
（教員研修留学生、韓国）

Tips for Experiencing and Enjoying Japan エストレルヤド・エマヌウェル ……30
（教員研修留学生、フィリピン）

日本人学生の声

期待以上の留学生活 ……大西　慧 ……35
（教養学科　文化研究専攻欧米言語文化コース）

Study Abroad Report ……小島　優 ……37
（教養学科　文化研究専攻欧米言語文化コース）

オーストラリア語学研修で得たもの ……直　妙 ……39

（教養学科　スポーツ専攻）
台湾交換留学について ……水落　智美 ……41
（教養学科　情報科学専攻）

第三部　国際センター記録

平成 26 年度　国際教育部門活動報告 ……43
平成 27 年度　国際教育部門活動報告 ……56
平成 26 年度　国際事業部門活動報告 ……68
平成 27 年度　国際事業部門活動報告 ……72
平成 26 年度　国際センター行事 ……79
平成 27 年度　国際センター行事 ……93

付　記

平成 26・27 年度国際センター運営委員会委員名簿 ……105
平成 26・27 年度留学生宿舎運営委員会名簿 ……106
平成 26・27 年度国際交流委員会名簿 ……106
平成 26・27 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿 ……108
平成 26・27 年度留学生推薦選考会議名簿 ……108
平成 26・27 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿 ……109

編集後記 ……110

巻頭言

伊　藤　敏　雄
国際センター長

本学の国際化を促進するために、旧留学生センターが国際センターに改組されてほぼ７年になります。この間、向井康比己前センター長の時に、教員増とともに国際教育と国際事業の２部門が設置され、本センターの機能が強化されました。また、２０１４年４月に就任された栗林澄夫新学長が､大学のグローバル化という方針を打ち出されていますので、本センターの役割が増大しています。そのような状況における本センターのこの１年間の活動状況とその成果をまとめたのがこの冊子です。

交流協定校は、国際センターに改組されたときには２４校でしたが、本年度、学内の諸先生の御協力により、シンガポールの南洋理工大学ＮＩＥ（国立教育学院）とオーストラリアのクイーンズランド大学生涯教育･TESOL 研究所の２校が増え、４２校になりました。

海外からの留学生の数は、一時１００人ほどに落ち込んだことがありますが、最近は約１５０人となっており、今年度もほぼ同様でした。日本人の派遣学生も、年間１０人前後であったのが、２０１３年度には１７人に増え、本年度も１７人です。本学の学生の海外留学を奨励し、派遣学生に対して経済的な負担を軽減するために授業料免除制度が２０１３年度に新設され、本年度も１０人の学生がこの制度を利用して留学しています。

国際共同研究の実施や国際シンポジウム開催、海外からの研究者や研修生の受入などに対しても、国際センターとして積極的に支援しています。本年度は、ロンドン大学ＩＯＥの先生や南洋理工大学ＮＩＥの学院長の講演などを支援したほか、１１月にセンター主催で第５回国際シンポジウム「教員養成大学における国際化――アジアとの学生交流を中心に――」を実施しました。

また、留学生や国際交流に関する本来の業務に加え、新しい取り組みやプログラムも実施しています。２０１３年度にアメリカ、オーストラリアでの研修を、教養基礎科目の中の授業「海外文化研究」として単位化しましたが、本年度は、ドイツ、フランス、韓国、台湾での研修も同様に単位化しています。日本語日本文化研修留学生や交換留学生のための体験型の授業､「大阪の文化」や「日本の伝統文化」も引き続き開設しました。一方、留学生と日本人学生との交流を促進するため、前年度同様に、国際交流週間を開催するとともに、留学生が日本人学生に母国語を教えるランゲージ・テーブルも開催しました。さらに、２０１３年度に、JASSO（留学生交流支援制度、短期受け入れ）に採択された２週間のプログラム、OKU SICEP（2013 OKU School Internship and Cultural Experience Program）を実施しましたが、本年度はドイツ、韓国からの短期受け入れも採択されました。日本に関心はあるが、交換留学生として１学期以上日本に留学するだけの語学力のな

い学生のために企画されたものです。このようなプログラムが充実していけば、協定校からさらに留学生が増やせると思い、積極的に取り組んでいます。

グローバル化が進んでいる社会的背景と、受入留学生と派遣学生について文部科学省が２０２０年に現在の２倍とすることを目標に掲げていることから、本学もそれに応える形で積極的に増やしていく必要性を感じています。向井前センター長が言われたように、今後、アジアではインドネシア、マレーシア、インドおよび中央アジアの国々、さらに中南米の国々、北米・ニュージーランドなどの英語圏の大学、ヨーロッパの各地域の大学と国際交流を広げていく必要があると思います。同時に、受入留学生を増やすためには、宿舎の整備が大きな課題と思っています。

昨年４月に国際センター長となってから、国際センターのＢ３棟への移転、教育研修留学生の宿舎問題などいろいろありましたが、１年が経とうとしています。しかし、思いがけず４月から教員養成課程長をお引き受けすることになり、任期半ばで国際センターを去ることになりました。この１年間、国際センター・国際係の教職員はもとより、国際センター運営委員および国際交流委員会の皆様、各事業に協力いただいている先生方には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。また、栗林学長と向井副学長には、いろいろと御教導いただきありがとうございました。

国際センターはさらなる変革が求められていますので、時期センター長のもとで、センターの全構成員が英知を出し合い、さらなる飛躍と新たな発展を遂げられることをお祈り申し上げます。

本学のグローバル化促進のためには、国際センターだけではなく、全学教職員の一丸となった協力体制が必要ですので、これまで以上にご支援下さいますようお願い申し上げます。

就任のご挨拶

高　橋　登
国際センター長

2015 年４月より，国際センター長に就任しました。これまでも，大学院生や教員研修留学生，研究生などを受け入れ，指導してきましたので，国際センターの教職員のみなさんにはいろいろとお世話になってきましたが，センター長として内側からセンターの仕事を見るようになり，センターの役割の大きさに改めて気づかされた次第です。

本学は教員養成系大学であり，学生の関心も日本の教育に向かいがちなので，海外に強い関心をもつ学生はこれまであまり多くありませんでした。けれども世界が流動化し，グローバル化する中で，私たちも否応なく世界に目を向けざるを得なくなっています。日本語を母語としない子ども達が日本で学ぶことも増えていますし，欧米だけでなく，アジア諸国も含め，世界中の優れた教育を学び，それを積極的に取り入れることが求められています。日本人学生が海外の小学校等に赴き，授業を行ったり子ども達と関わることも増えています。また逆に，日本の文化や教育に関心を持つ学生もふえており，海外の学生が日本の小学校で実習するような教育実習も少しずつ増えています。

世界には多様な価値観が存在することに気づき，異なる文化を知り，排除するのではなく互いに認め合い，尊敬し合えるような関係を築くことが，今の社会を生きる若者には求められています。多くの学生が海外で学び，また，多くの海外からの学生が本学で学ぶことは，そのための貴重な契機となると考えています。

国際センターがそうした役割を果たしていけるよう，一層努力して行こうと考えています。

台湾における数学学会の交流*

城地　茂
国際センター　国際事業部門

１、緒論

台湾は、国交を持っている国家・地域が少ないが、学術やスポーツなどの文化交流に関しては、比較的進められている。たとえば、オリンピックへは、「中華台北」（Chinese Taipei IOC コード: TPE）として代表団を送っている。

学術の分野では、日本最初の学術団体である日本数学会に相当する Mathematical Society located in Taipei, China[1] （以下、「台湾の数学会」と仮称する。理事長、陳栄凱教授（台湾大学)）が、国際数学連合に加盟している。

国際数学連合では、2015 年より京都大学数理解析研究所の前所長である森重文教授（1951-）が 2015 年より総裁に就任することもあり、2014 年 12 月 6 日 7 日、年会は、森重文教授のほかに韓国数学会会長 Myung-Hwan Kim 教授（ソウル国立大学）も招かれ、国際学会として盛大に開かれた。

そこで、本稿では数学会の総会について、数学の内容ではなく、国際交流の観点から報告したい。

2、成功大学について

2014 年度[2]の年会の会場には、台湾南部の台南市[3]にある成功大学数学系（数学科）で行われた。成功大学は、日本統治時代の台南高等工業学校[4]を起源としている。台南は、台湾で最初に開発が行われ[5]、「台湾府」が置かれていた台湾の古都である。現在の校名[6]は、台

---

* 本稿は、科学研究費補助金、基盤研究（C）課題番号 22500962（代表者・城地茂）の補助を受けた。

1 中華圏には、Chinese Mathematical Society の他に香港では独自に The Hong Kong Mathematical Society （略称 HKMS）が活動している。

2 台湾では、8 月 1 日よりその西暦に対応する年の学年度が始まる。当然、翌年の 7 月 31 日が学年度の終了になる。

3 県より格上の行政院直轄市。2010 年 12 月 25 日に、台湾省（1998 年 12 月 20 日に行政機能を「凍結」している）隷下の台南県と台南市（県と同格の省直轄市）を合併して、行政院直轄市となった。なお、行政院直轄市には、台北市（1967 年 7 月 1 日）、高雄市（1979 年 7 月 1 日直轄市、2010 年 12 月 25 日旧高雄県と合併)、台中市（2010 年 12 月 25 日旧台中県と台中市が合併し昇格)、新北市（2010 年 12 月 25 日旧台北県が昇格)、桃園市（2014 年 12 月 25 日旧桃園市を含めた桃園県が昇格）がある。

4 1931 年創立で、正式名称は台湾総督府台南高等工業学校。

5 「一府二鹿三艋舺（ばんか）」と言われ、台湾府（台南市)、鹿港（彰化県鹿港鎮)、艋舺（台北市万華区）が商業の中心地であった。

南に縁のある鄭成功[7]（1624-1662）の名からきている。2014 年現在、文学院、理学院、社会科学院、管理学院（経営学部に近い）、工学院、電機資訊学院、生物科学与科技学院、医学院（薬学部を含む）の８学部を有する台湾南部最大の総合大学で、教員約 1,400 名、学生 21,979 名（学部生、11,501 名、大学院生 10,478 名）を有している。なお、キャンパスは、11 キャンパスあるが、成功キャンパス、光復キャンパス[8]、勝利キャンパス、自強キャンパス、成杏キャンパス（元建国キャンパス）、力行キャンパス、敬業キャンパス、東寧キャンパスの８キャンパスは台南駅東口の東に隣接して存在しており、台南市にある安南キャンパス（水質試験場）・帰仁キャンパス（宇宙センター）と雲林県斗六キャンパス（医学部附属病院斗六分館）の３キャンパスが離れている。

数学系は、大学本部のある成功キャンパスにある。ここは、起源となった台南高等工業学校のあった場所である。100 年を越すキャンパスには熱帯植物が生い茂り、また、キャンパスを囲む壁が撤去され、自由にキャンパス内へ入ることができるようになったため、市民の憩いの場所となっている。結婚式の写真撮影をしていることもあるほどである。

数学系のある建物は、大きな草地を挟んで新図書館の向かいにある。国際会議の記念撮影はこの図書館前で行われた。

また、図書館には、日本統治時代の書籍も残されていた（図２）参照。ここでは、日本十進分類法が使われていたのが印象的である。

図１　成功大学附属図書館特別図書室

図２　特別図書室蔵　日本書籍

3、数学史研究と数学教育ついて

日本数学会は、1877 年 5 月に東京数学会社として設立した。これは、欧米の方式である

---

[6] 校名は、1944 年に専門学校となり「台南工業専門学校」、終戦後は 1946 年 2 月に「台湾省立台南工業専科学校（専門学校）」1946 年 10 月には単科大学に昇格し「台湾省立工学院（台南工学院）」1956 年に総合大学として台湾省立成功大学となり、1971 年には国立となっている。

[7] 鄭芝龍（1604 -1661）と平戸藩士の娘・田川松（1601-1646）の子として平戸で生まれる。『国性爺合戦』（近松門左衛門、1715 年初演）の主人公として有名。日本と中国、台湾で好評価を受けている人物である。

[8] 台湾歩兵第 2 連隊（1907 年 11 月 7 日）のあった場所で、現在でも隊舎がのこされている。

所属機関を超えた同じ分野の研究者が集う学会である。英国の王立協会（The Royal Society）に範をとっており、英語名も The Mathematical Society of Japan （略称 MSJ）と Society の文字を使っている。日本数学史の観点からは、「近世」の和算を廃止して洋算となるきっかけとなった組織であり、1877 年は日本数学史が近代を迎えた記念すべき年[9]となっている。数学と言っても、当時は、数学者以外に物理学者も含まれており、1884 年 6 月には、東京数学物理学会に改組している。

このように所属機関をこえた組織が必要だったのは、数学の範囲が広範にわたっており、数学科や応用数学科を持つ機関でも、同じ研究分野の数学者が多く在籍することはまれである。一方、いわゆる一般教養としてはほとんどの機関が数学を持っており、数学者が分散しているということが大きい。日本数学会に次の 10 の分科会が設けられている。

数学基礎論および歴史
代数学
幾何学
函数論
函数方程式論
実函数論
函数解析学
統計数学
応用数学
トポロジー

これは、台湾であっても同じような状況であり、今回の学会でも、

数論と代数
分析と最適化
幾何
動態系統・生物数学（数理生物学）
偏微分方程
離散数学
確率（機率）・統計
計算数学

の８分科会に分かれ、２日目にはこの８分科会に

数学教育

[9] 城地茂（2014）『和算の再発見』:13-15。

が加わり、９分科会となっている。日本では、数学教育は別の学会組織を作っており、日本以上に広範な組織になっている。これは、数理生物学も含まれているということからも分かることである。

報告者の研究分野である数学史は､台湾では数学教育に分類されることが多い｡これは、歴史的な発達過程と個人の発達過程は一致することが多く、教育への応用が期待されるからである。たとえば、中央研究院数学研究所の李国偉教授は、幾何が専門であるが、科技部[10]では数学教育の責任者になっており、同時に、Committee for History of Science of the Academia Sinica, Taipei (DHS)（国際科学史・科学哲学学会科学グループ中華民国委員会）の委員でもある。

このように日本では別の学会になっている数学史や数学教育まで含まれているため、より広範な組織になっている。所属する学科も、数学科や応用数学科だけではなく、一般教養と担当する通識教育中心や経済、経営など社会科学関連学科、教育学部や地域研究を行う諸学科であり文学部もしくは外国語学部にまで及んでいる。

4、数学教育の広範化

第３節で述べたように、数学の範囲は極めて広く、経済学や経営学はもちろん、数学教育や歴史学、地域研究（応用日語系を含む応用外語系）などまでが参画している。こうなると、一つの学術機関に同じ分野の研究者が在籍する可能性は低く、学会活動が必須になってくる。こうした場合、いわゆる懇親会が大きな役割を持ってくる。１日目の終了後にバンケットがあったが、２日目の昼食時も大きな役割を持っていた。

若手研究者の関心事について、経験豊富な研究者が論じる光景が分野ごとに見られた。学術的なことはもちろん、科技部専題研究申請の申請に関わる相談にまで乗っていた。研究や関心の動向といったものまでが話題となっていたが、いずれにせよ、こうした有形無形の刺激は若手研究者には必要なものだろう。

今回の数学教育問題で最大の問題になったのは、高校の「義務」教育化問題であった。台湾は教育を含めて制度の変革が急激である。たとえば、小学校段階での英語教育も 2001 年から実施している。そして、今年、2014 年より「十二年国民基本教育（十二年国教)」を実施し、高校まで「義務化」したのである。

数学関連学科（数学科や応用数学科）の卒業生は、教員になることが多い。従来は、教員養成系大学（中等教育機関[11]の教員養成を主たる目的とする「師範大学」と初等教育教員を養成を主たる目的とする「教育大学」がある）であったが、2004 年に一般大学でも『師

---

[10] 行政院（内閣）の科学技術発展の最高機関で日本の省に相当する。1959 年に成立した国家長期発展科学委員会が、1967 年 8 月に行政院国家科学委員会に改称、2014 年 3 月 3 日に部に昇格した。科学技術の推進、学術研究の支援、サイエンス・パークの発展などを所轄する。

[11] 日本の普通科高等学校に相当する高級中学（女子高もある)、実業高等学校に相当する高級職業学校、中学校に相当する国民中学がある。前二者は、2014 年の改革以前は、入試システムが異なる複線教育システムであった。

資培育法』[12]の改正により教員養成が可能になったからである。

本稿で、括弧つきで「義務化」としたのは、強制的義務として高校まで教育するのではなく、

（1） 高校の学費免除

（2） 国公立を問わず入学試験の撤廃

という政策である。

しかし、先に述べたように、受験戦争の激しい台湾でこのようなことが可能なのか、疑問であった。数学会の参加者は多くが大学の教員なので、実際のところは分かりにくかった。そこで、本学の姉妹校であり、台湾南部にある高雄師範大学の附属高級中学（高校）で聞き取り調査を行った。高雄師範大学附属高級中学は、高雄市屈指の進学校で、設備もエアロビクス教室があるという充実振りである。誰しもこうした有名校に進学したいのは人情である。

ここでの聞き取り調査によると、入学試験は定員の 50%を限度に残存するということが分かった。また、残りの 50%も小中学校のように高校も校区を設け、校区内住民の子弟を優先的に入学させるシステムなため、戸口（日本の住民票に相当）を有名校の校区に移すという現象も見られるそうである。そのため、有名校付近の地価や家賃が高騰するという現象まで見られるそうである。

5、まとめ

今年度の数学教育の主な話題は、「十二年国民基本教育[13]」（小中高の 12 年）に関するものであった。これは、高校までを義務教育化するというものとは、少し趣を異にしたもので、高校入試の撤廃、高校の学費を免除を柱とするものと説明されている。しかし、目標値でも無試験入学率が 85%以上と有名進学校の入学試験を黙認する構造になっている。

台湾では、2008 年に小学校での英語教育を始めるなど、日本に先駆けた教育施策を行っている。2014 年の義務教育 12 年化も日本に先駆けてのことであり、少子化や受験競争など日本との条件が近いものである。そこでの数学教育のあり方は、将来の日本における数学教育のあり方を考える上で重要な経験となるだろう。今後の動向が注目される。

参考文献

山崎 直也（2001.5）「九年国民教育政策の研究—戦後台湾教育の二面性の起源に関する考察」『日本台湾学会報』3:50-69

[12] 1979 年 11 月 21 日、総統（68）台統（一）義字第 5816 号令により制定。最終改正は、2014 年 6 月 4 日。一般大学の師資培育中心（教員養成課程）でも養成が可能になった。

[13] 国民教育とは、従来、義務教育を意味していた。教育部（文部科学省）には、これまで国民教育司（小学校と中学校を統括する局）があったが、2013 年 1 月 1 日より国民及学前教育署（庁に相当）に昇格している。

劉 伯雯・城地 茂（2001.6）「科技大学における日本語・中国語および英語能力の相関について」『朝陽学報』6:113-128.

城地 茂（2001.3）「台湾の助理教授の法制と実態：アジアの頭脳環流を軸として」『現代台湾研究』21:149-158.

城地 茂（2003.3）「台湾における日本統治時代の珠算教育」『台湾応用日語研究』1:1-24.

城地 茂（2012.4）「台湾における教育実習の法制と実態」『（大阪教育大学）国際センター年報』18:8-14.

城地 茂（2014.3）「日本留学の動機調査―台湾からの交換留学生を例として」『（大阪教育大学）国際センター年報』19:3-11.

ドイツ語学研修報告

－芸術家に出会うフィールドワーク－

赤木　登代
国際センター　国際事業部門

０．　はじめに

平成 27 年度のドイツ語学研修は、平成 25 年度に続き第 2 回目の実施であったが、8 月 2 日～8 月 31 日にトリア大学（Universität Trier）で開催されているサマー・コース（43. Internationaler Ferienkurs an der Universität Trier）に 3 名の学生が参加した。今回から教養基礎科目「海外文化研究（2 単位）」という授業として単位化され、また同時に JASSO の海外留学派遣制度（協定派遣）に申請し、採択された。

これは日本人の海外留学を促進しようとする制度で、参加する学生に対して行く地域ごとに異なるが、奨学金（ドイツは 8 万円）が支給されるというものである。本研修は「ドイツ・フランス文化研修－芸術家と出会うフィールドワーク―」というプログラムとして認められ、ドイツ・フランス合わせて 16 名に対して奨学金が授与されることになった。別途フランスへの語学研修（参加者 4 名）もプログラムに含まれており、9 月に実施されたが、本報告では授業を担当し、自ら引率を行ったドイツ研修に関して報告を行う。

１．　出発まで：ドイツ滞在とフィールドワークの準備

授業「海外文化研究」は、語学研修に参加する前に授業を 5 回行い、ドイツでの語学研修に参加する。この語学研修は所定のコースを修了すると、修了証書と成績証が発行され、ヨーロッパの大学の共通単位 5ECTS が付与される。この成績と帰国後の成果発表会およびレポートの提出でもって単位が認められる仕組みである。

事前の準備は大きく次の 3 点からなる。

① ドイツでの滞在に関するアドバイス：
　気候、お金、持ち物、習慣、食事、服装等

② ドイツ語日常会話（シチュエーション練習）：
　「自己紹介」「駅で」「レストランで」「買い物」

③ フィールドワークの準備：
　芸術家の選定、情報収集そして文献講読

研修の引率はで往路のみで、復路は学生たちのみ協力しあい、無事一緒に帰ってきた。引率教員として、フランクフルト空港に到着後 1 泊し、そこからトリアにバスで移動し、語学研修の受付を終え、寮に入り、語学研修が始まってクラスが確定したところまでを見

届けた。あとは学生だけで約 4 週間の語学研修を受け、修了後フランクフルトへバスで移動し、そこでフィールドワークを 1 日行い、翌日一緒に空港へ移動し、行きと同じオランダ・アムステルダム経由で帰国した。

ドイツが初めてという学生ばかりだったので､約 1 カ月間の滞在の注意を丁寧に行った。たとえば、8 月といえば大阪では猛暑であるが、ドイツでは気温の変化が激しい時期で 30 度を超え、夏らしい天気が続くかと思えば、突然雨が続き、気温がいきなり 15、16 度まで下がってしまうこともある。よって、夏服だけでなく、カーディガンやジャケットが必要であることを伝えた。また、衛生状態は問題ないが、硬水のためかお腹をこわすことがあること、薬は日本と違って簡単に買えないので、飲みなれている薬があれば持参する方が良いとアドバイスした。もっとも大切なお金は現金がなくなったときのために必ずクレジットカードを携行した方が良く、しかも国際的に通用性の高いカードを選ぶように指示を与えた。

参加者のドイツ語レベルはおそらく CEFR の A1~A2 という初心者から初級のレベルだと思われたのと、会話のトレーニングを授業で十分に行っていないので、とにかくサバイバルするために「自己紹介」「駅で」「レストランで」そして「買い物」というシチュエーションで使われる定型表現をもう一度復習した。特に、「駅で」は語学コース終了後に 1 日「フィールドワークの日」としてフランクフルトから目的地に鉄道を利用して、ひとりで移動しなければならないため、切符売り場の窓口での会話だけでなく、切符の種類（1 等と 2 等、片道と往復)、券売機の使い方そして時刻表の見方についても講義した。

課題の「芸術家と出会うフィールドワーク」は次の手順で進めた。

A:　芸術家を一人選ぶ

学生が自由にドイツ語圏の芸術家（作家、詩人、建築家、音楽家、画家、彫刻家等）から一人、関心があり、調査してみたいと思う人物を選ぶ。ただし、1 日しか時間がないので、調査可能かどうかによって別の人物に変更せざるを得ない場合もある。

B: 芸術家に関する情報収集

選んだ芸術家に関して、どこで、どんな調査をするのかを決めるために、あらためてその人物に関して文献やインターネットで調べてもらう。どこの町で生まれ、どこでもっとも活躍したのか、生家、資料館、ミュージアム等の場所の確認を行ってもらう。そして、テーマを決め、行く先を決定する。その際、注意すべきは「日本にいてはできない、わからないこと」を調べるようにすることである。

この A と B の 2 点についてまず A4 で 1 枚程度にまとめ授業内で報告してもらった。その結果、3 人の学生は次の芸術家を選んだ。

（1）　H さん（学部生・芸術専攻音楽コース 3 年生）

彼女は自身が音楽（声学）を専攻していて、もっとも好きな作曲家であるローベルト・シューマン（Robert Schumann 1810-1856）を選択した。彼が生まれた町はツヴィッカウ（Zwickau）で、現在、生家は資料館となっているが、フランクフルト

からはかなり離れているため、彼の音楽家としての生涯でもっとも創作が充実した時期を過ごしたライプチヒ（Leipzig）を調査の地として選んだ。ここには彼が妻クラーラと過ごした家が「シューマン・ハウス（Schumann Haus)」と呼ばれる資料館としてある。Hさんはオリジナルの楽譜や彼の手紙等を見ることで彼の創作への思いを知るだけでなく、その家の周囲を散策し、たとえばシューマンが好んで通い、仲間たちと議論を戦わせたカフェ「カフェ・バウム（Café Baum)」を訪れることで当時の時代状況をよりよく理解することができた。

（２） Mさん（大学院・音楽教育専攻１年生）

彼女はヨハン・セバスティアン・バッハ（Johann Sebastian Bach 1685-1750）を調査対象とした。Mさんもまた音楽教育専攻で、特にバッハの作品をピアノで演奏することを好んでいることから、ぜひともバッハのゆかりの地を訪れたいと考えた。そこで、彼の生家があり、現在資料館として公開されているアイゼナハ（Eisenach）に行くことに決めた。もちろん、バッハはライプチヒのトーマス教会（Thomas Kirche）で長年カントル（Kantor）として過ごしたわけであるが、彼女の関心は当時のバッハが使用していた楽器にあったので、古楽器が展示されており、しかも演奏を聴くことができる生家を選んだのである。バッハの時代、まだピアノは十分発達しておらず、バッハはチェンバロやクラヴィコードと呼ばれる鍵盤楽器を弾いていた。今日ピアノ曲として演奏される楽曲が、資料館の専門家によって古楽器で演奏されるのを実際に聴いてみることは、彼女のバッハ作品への理解を深めることになった。

（３） Ｙさん（学部生・第２部（夜間）小学校教員養成５年課程５年生）

Ｙさんはドイツ文学史上最大の詩人・作家であるヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832）を選んだ。彼がもっとも生涯で長い時間を過ごしたのはワイマール（Weimar）であるが、彼女の関心はゲーテの生い立ちにあった。つまり、彼が生まれたフランクフルト・アム・マイン（Frankfurt am Main）で、現在資料館として公開されている生家を訪れることに決めた。実は、ゲーテの生家は第２次世界大戦中に連合軍の激しい爆撃により焼失したが、内部の家具や資料は疎開させていたため、焼失をまぬがれ、また生家も戦前の写真や各種の資料をもとにほぼ元通りに復元されている。Ｙさんは生家にある当時の裕福な市民家庭に特徴的な調度品に興味を引かれた。特に当時としては贅沢品であった時計がいくつもあり、それぞれに芸術的な価値を有していることや内装にも関心を向け、これらをゲーテの作品にも関連付けてユニークな調査を行った。この結果、Ｙさんは 18 世紀の裕福な市民家庭の生活に関して「住まい」を通じて理解を深めることができた。

２． まとめ：フィールドワークの効用

今回のプログラムは、

① 出発前に対象となる芸術家と調査地についてしっかりと事前調査を行う。

② 語学研修で約４週間ドイツ語をブラッシュアップする。

③ 語学研修の成果を活用し、フィールドワークを行う。

というステップを踏んで、実施した。

帰国後、11 月 18 日（水）の午後に公開で、主にドイツ語学研修に興味を持つ学生対象に行った報告会では、3 人に語学研修の成果とフィールドワークの調査結果を合わせて 15 分間のプレゼンテーションを行ってもらった。結論としては、それぞれが実行する前はひとりで、しかも外国で調査活動を行うことに不安を感じていたが、意欲的に調査を行い、フィールドワークにおいて期待以上の効果を挙げてくれた。その報告にはインターネットや文献からだけではわからない情報が詰まっており、また彼女ら自身のユニークな観点から導き出された結果が含まれていたのである。彼女ら自身の満足度も非常に高かった。つまり、「ひとりで」「外国のドイツで」「自分で立てた計画に沿ったフィールドワーク」をやり遂げたたことで、大きな自信になったようである。これは事前に十分な調査と準備を行ったこと、そして語学研修に積極的に参加したことで「話す」習慣が身についていたことも成功の要因として挙げられるだろう。

平成 28 年度もドイツ語学研修は JASSO のプログラムに採択された。現在、8 名の学生が参加予定であるが、やはり入念な準備と語学力の強化でユニークなフィールドワークを行い、自分の足で文化理解を深めてくれることを期待している。

スイスの大学と国際化

中山　あおい
国際センター　国際教育部門

１．はじめに

スイスでは、ドイツに先がけ大学のオートノミーを強化する方向で、1998 年4 月の段階で、連邦工科大学チューリッヒ校、連邦工科大学ローザンヌ校、ザンクト・ガレン大学、ジュネーブ大学、バーゼル大学、ベルン大学、ニュシャテル大学、プリブール大学で新大学法の導入あるいは大学法の改定がなされている。そしてニュー・パブリック・マネージメント（NPM）の導入により、大学の最高決定機関として大学理事会（Hochschulrat）を置いた。この構成員は大学の外部、例えば州政府や経済界からなり、州と大学の間に立ち、大学の経営戦略を担っている。その一方で、戦略を実行に移し運営する大学という分担の分担が進んでいる。しかしながらその結果、大学理事会に多くの権限があり、教授会の権限は減少しているとの指摘もある（今井、1999）。

また、スイスは 1999 年ボローニャ宣言に署名し、ECTC とともに学士と修士を導入しているが、それ以前の学位（Lizentiat/Licence）は修士に相当するため、学士を終えても多くの学生が修士課程に進学している。

ここでは、このような大学の改革が進むスイスにおける大学の歴史的発展を概観し、スイスの高等教育を担う大学を紹介する。

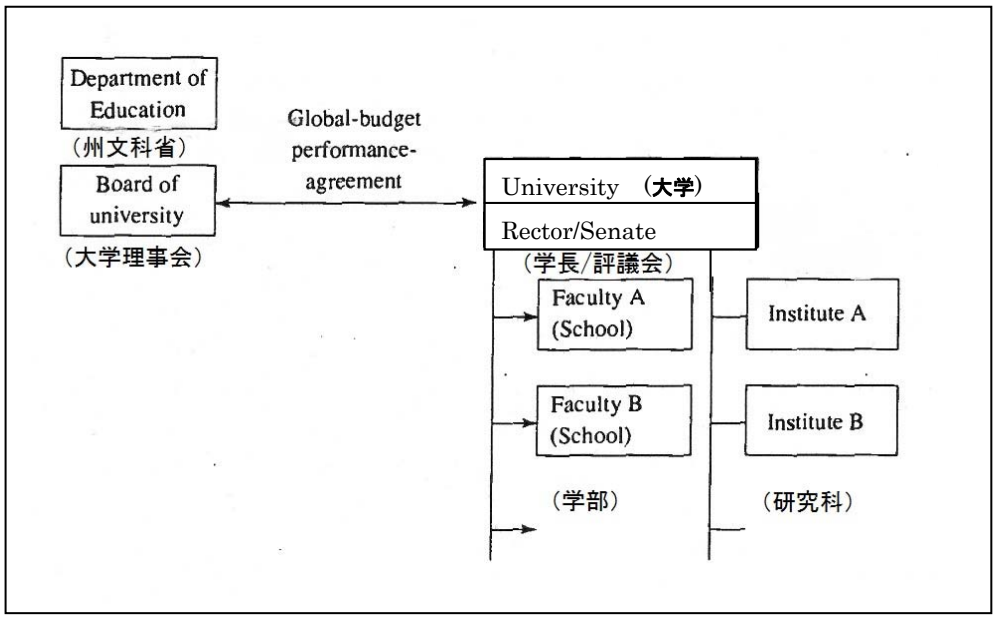


図１　ザンクト・ガレン大学の組織図

出典）Francois Grin, F Metzger, C and Gruner, A (1997 p.114)

２．スイスの大学の歴史と特徴

連邦制をとるスイスには 26 の州（カントン）があり、それぞれの州の教育省が、初等教育から高等教育にいたるまで独立した教育の権限を持ち、大学も州に属している。全ての州に大学があるわけではなく、スイス全体で 10 の総合大学（Universität）と多様な専門大学（Fachhochschule）がある。さらに、スイス連邦によって設立された連邦工科大学チューリッヒ校と連邦工科大学ローザンヌ校がある。

スイスの大学の特徴としては、人口比に対して大学の数が多いことが挙げられる。ノーベル賞受賞者数（世界第 6 位）も同様に人口比に対して比率が高いことが話題になるが、その背景には、スイスが世界でも質の高い教育や研究レベルを維持していることが考えられる。スイスは近隣諸国と異なり大学の大衆化とは別の道を歩んでおり、厳選された学生数（大学進学率は約 20%）を保つ一方で、歴史的に亡命者を受け入れてきた経緯から、国外の優秀な教員と学生を吸収してきた。例えば、2014 年現在、バーゼル大学の学生の 27%、連邦工科大学ローザンヌ校の学生の半数は外国人であり、アイン・シュタインが学んだ連邦工科大学チューリッヒ校においては 1999 年にスイス出身の教授陣と外国出身の教授陣の数が逆転している（図２）。

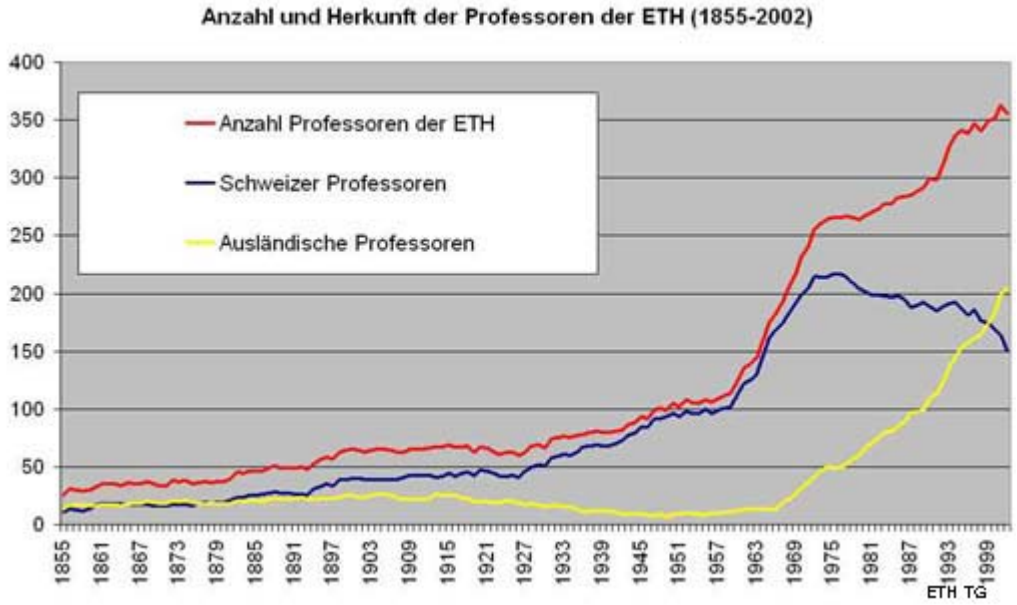


図２　連邦工科大学チューリッヒ校における出身地別教授数

出典）http://www.ethistory.ethz.ch/

また、スイスの大学はヨーロッパのなかでも早くから女性に門戸を開いたことで知られている。1864 年にチューリッヒ大学、1872 年にベルン大学とジュネーブ大学において女性が入学できるようになった。当時のドイツ語話者の女性にとってスイスの大学が唯一開かれた大学であり、ロシア出身の女子学生の多くはスイスで医学を学んだ。1867 年にチュー

リッヒでナデージタ・スースロヴァナがヨーロッパで最初に医学博士を付与された女性となり、1918 年にはジュネーブ大学でロシア出身のリナ・ステルヌが女性として初めて生理化学講座の教授となった。

このように歴史的にも外国人と女性に開かれたスイスの大学であるが、その起源は宗教改革時に誕生したアカデミーに遡る。1815 年にはスイスにはバーゼル大学が一校と、ベルン、ジュネーブ、ローザンヌに三校のアカデミーがあるだけであった。1830 年代に各州において自由主義者による政権の奪取とともに、大学の世俗化と拡張が行われたが、そのための費用を外国人と他国で閉め出されていた女性の受け入れによって補填したというスイスの事情もあった[1)]。さらに、ドイツ語圏の大学はドイツを、フランス語圏の大学はフランスを向いていたこともスイスの大学の特徴である。これらの特徴のもとにスイスの大学は、「ドイツ・モデルの影響にあったにもかかわらず、近隣の国々よりもめざましい知的な革新の場」となり、他のヨーロッパの大学よりかなり早く、ジュネーブ大学では経済社会学部が創設された[2)]。スイスの大学は歴史的にヨーロッパ各地から自由や質の高い大学環境を求める多くの学生や学者を受け入れつつ今日に至っている。

３．スイスの大学

それではここで、いくつか有名なスイスの大学について紹介する。

（１）バーゼル大学（Universität Basel）

バーゼル大学は 1460 年に設立されたスイス最古の大学である。設立当初は神学、法学、医学、人文科学の 4 学部で構成され、227 名の学生と教員がいたが、現在は 7 つの学部に約 12500 人の学生と 300 人を超える教授陣を擁する[3)]。17 世紀にはベルヌーイ家出身の数学者や物理学者が活躍し、19 世紀以来、自然科学が中心的な役割を果たしている。連邦立の大学になることも議論されたことがあったが、現在も州（バーゼル＝シュタット準州とバーゼル州）の管轄下にある。1971 年には世界的に有名なバイオセンター（Biozentrum）が設立され、2003 年には心理学部が設立された。また、創立当初の 15 世紀後半のバーゼルでは印刷、出版業が栄え、バーゼル大学の図書館はスイスで最も大きな図書館の一つになっている。著名な教授陣としてはエラスムス、ニーチェ、ヤスパース、カール・バルト等がおり、ノーベル賞受賞者を 2 人（Tadeus Reichstein, Werner Arber）輩出している。

（２）スイス連邦工科大学チューリッヒ校（Eidgenössische Technische Hochschule Zürich）

スイス連邦工科大学（ETH Zürich）は 1855 年にポリテクニックとして設立され、1911 年に現在の名称に改名された。スイスの大学は州に管理されているため、その設立をめぐっては議論があったが、1854 年に ETH 設立のための法が制定され、スイスで初めての連邦直属の高等教育機関となり、国家統合のシンボルとなった。ローザンヌには姉妹大学であるスイス連邦工科大学ローザンヌ校がある。設立当初の学生数は 68 人だったが、年々その数は増加し、1968 年以降は女子学生の数も増え（31%）、現在は 16 学科、23 の学士過

程に約 8400 人の学生、40 の修士課程に約 4700 人の学生がおり、さらに約 3900 人の博士課程の学生がいる[4)]。また 1970 年代から国際化が進展し、外国籍の教授が増加しており、外国籍の学生も多い（40%）[5)]。ETH Zürich はヨーロッパの先進的な 5 つの工科大学からなる IDEA リーグの創設時からのメンバーであり、様々な世界の大学ランキングの上位に位置づけられている（2014 年のタイム誌の世界ランキングでは 13 位、ヨーロッパでは 4 位）。卒業生にはヴィルヘルム･レントゲンやアイン・シュタイン等がおり、21 人のノーベル受賞者を輩出している。

（３）ジュネーブ大学（Université de Genève）

スイスのフランス語圏にあるジュネーブ大学は 1559 年にジャン・カルバンによりアカデミーとして創立された。設立当初は神学と人文科学のアカデミーであったが、1873 年に大学に昇格し、ヨーロッパの大学ではかなり早く 1915 年に経済社会科学部が設立された。現在のジュネーブ大学には 10 の学部があり、29 の学士過程と 81 の修士課程、79 の博士課程に約 16500 人の学生を擁し、学生数ではスイスで２番目に大きい大学である[6)]。国際的な都市に相応しく、学生も 140 カ国以上の国々から集まり（38%）、女子学生の割合も高い（61%）[7)]。生涯学習にも力をいれ、280 のプログラムを提供している。ジュネーブ大学はヨーロッパ研究大学連盟に所属しており、世界の大学ランキングにおいてもトップ 100 に入ることが多い（2014 年上海交通大学ランキング 66 位、2014 年 QS 世界大学ランキング 85 位）。卒業生にはマルセル･ジュノー、コフィ・アナン等がいる。

４．おわりに

スイスの大学の歴史的発展を概観したが、日本やアメリカのような大学の大衆化の道を進まず、少数精鋭の学生選抜を行っている点でスイスの高等教育は独自の路線を歩むとともに、国外から優秀な学生や教授陣を招くことで、ヨーロッパの中でもグローバル化の進展が著しい。それは外国から自由と質の高い教育環境を求めて来た人々を受け入れてきたスイスの歴史的経緯の上に成り立っていると考えられる。そして、国際都市チューリッヒやジュネーブに世界的レベルの大学があることも、古くから国際的に開けたスイスの特徴と言えるだろう。日本でも留学生 30 万人計画が唱えられているが、スイスのように優秀な学生を国外から獲得できるようになるまでは、まだ多くの課題がある。英語による授業や国際的な単位互換システムなどの制度的な側面の拡充もさることながら、様々な文化的・言語的背景をもった人々を受け入れる姿勢などのソフト面の養成が必要となるだろう。チューリッヒの学校では移民を背景にもつ子どもが多く、そうした子どもが 40%を超えた学校には「多文化学校」として政府から財政的な支援を受けるとともに、「多文化学校」のためのプログラム開発が行われ、移民の子どもを受け入れる体制が整っている。多文化に開かれた姿勢はこのような小学校の環境のなかから育つのかもしれない。まして大学は国外にも広く開かれている。グローバル化が進む日本の学校や大学において、スイスから学ぶ

べき点は多いのではないだろうか。

注

1) クリストフ・シャルル、ジャック・ヴェルジェ著、岡山茂、谷口清彦訳（2009）『大学の歴史』文庫クセジュ
2) 前掲書
3) Universität Basel (2013) *Jahresbericht 2013 der Universität Basel*,
4) ETH Zürich (2013), *Jahresbericht 2013*
5) Ibid.
6) Bureau des statistiques, Olivia Peila, Rectorat Université de Genève（2014）*STATISTIQUE UNIVERSITAIRE,* Université de Genève
7) Ibid.

参考文献

Robert D. Anderson (2004)*European Universities from the Enlightenment to 1914*, Oxford University Press(R.D. アンダーソン著、安原 義仁、橋本 伸也訳（2012）『近代ヨーロッパ大学史―啓蒙期から 1914 年まで』 昭和堂)

横尾壮英著(1999)『大学の誕生と変貌―ヨーロッパ大学史断章』東信堂

Francois Grin, F Metzger, C and Gruner, A (1997),"Current Issues in Higher Education", *RIHE International Seminar Reports, No.10. Academic Reports in the World: Situation and Perspective in the Massification Stage of Higher Education,*Research Institute of Higher Education Hiroshima University

今井重孝（1999）「スイスの大学組織改革について―チューリヒ大学を手がかりとして」有本章編『ポスト大衆化段階の大学組織改革の国際比較研究（高等教育研究叢書（54））』広島大学教育研究センター

大阪教育大学で学んだこと

鄒　震

教養学科　情報科学専攻

（中 国）

四年間の大阪教育大学での留学生活は終わりに近づいています。この四年間に学んだことは数えきれません。一つ一つの思い出が全部一生の宝物になりました。

学業の面はもちろんのこと、留学のもっと大切なことは、様々な国の留学生と接する機会が多いため、異文化交流を通して、違う価値観をもって多様な角度から物事を説明することができるようになったことです。

大阪教育大学は外国人留学生に対して、様々な奨学金制度を設けていますので、その支援により、学業に専念し各勉強に励むことがきました。今まで支援してくださった方々に文書にて恐縮ですが、御礼を申し上げたいです。

卒業後、この四年間に学んだことを生かし、日本で就職することを決めています。そしてどこに行っても、母校の大阪教育大学出身ということを忘れずに、恥をかかないように頑張って参ります。

大阪教育大学に入学して、本当に良かったです。

であい

チャン・ティ・キュ・ミー
日本語日本文化研修留学生
(ベトナム)

日本で作った思い出は、人との「であい」が強く印象に残っている。

2013 年 10 月 1 日、関西空港に到着。家族と離れ、遠い所で一人暮らしをするなんて、私には初めてだ。ベトナムの空港で別れた時の泣きそうだった母の顔を思い出し、心のどこかが悲しいのだ。「日本語も少し分かるし、日本は安全な国だし、心配することはない」と親友は応援してくれたが、やはり一人で外国に行くのは心細いものだ。「あ、早くベトナムに帰りたいわ」と、私は思い込んだ。大阪行きの飛行機に乗った時、なんだか隣に座っているある中年の日本人の夫婦が気になった。二人とも楽しそうにパンフレットのような物を見ているらしい。話しかけてみたところ、彼らはベトナム旅行からの帰りだということが分かった。人見知りの私は、人の話を聞いても「そうですか」「ありがとう」といった言葉だけで言い返す。しかし、彼らは優しく話してくれたりして、今まで持っていた日本人に対する印象とは全然違うと気付いた。そして日本についての面白いことをいろいろ教えていただいた。ここで思い返してみると、私は大切なことを忘れてしまっていた。日本語が大好きだから勉強したこと、日本文化を実際に体験してみたいということなどそういう気持ちで日本へ行きたいと思っていた。今回こそ、せっかく日本に留学することになったのに悲しいとなんか思っちゃだめではないだろうか。それに、ベトナム旅行のたのしい思い出を語る彼らの姿を見て、決めたのだ。「そうだ。私も今回の長い日本旅行を楽しんで行こう」と。私は今でも覚えている。その日は美しい秋晴れの日だった。彼らとの短い会話もいい「であい」だと思う。これから、日本での生活のスタートだ。

私は「縁」という漢字が気に入っている。日本でいろいろな人に出逢えたことは、きっと前世から縁があるからだと信じている。

日本へ来てから、思っていたより外国の友達がたくさん出来た。なぜかというと、私が留学した大学にはベトナム人が私一人しかおらず、みんなと仲良くならないと一人ぼっちになっちゃうかもしれないと思ったのだ。しかし、そういうわけで外国の友達をたくさん作ることができ、みんなの国の面白い文化も少し理解できるようになった。国によって文化も様々という言葉をよく耳にするが、「様々って何が？」と疑問を持った。しかし、みんなと一緒に暮らしたり、お互いに意見を交わしたりして、異文化の実感が沸いた。例を 0 出してみれば、日本の「すすり文化」に驚いた。日本人はラーメンを食べる時音を出して食べるのが普通だが、ベトナムでは音を出して食べる人は礼儀正しくないと言われるも

のだ。こんなこともある。何人かの友達が集まって、みんなでパーティーをしようと自分の得意な料理を作る。私はある友達と一緒に焼き飯を作ることになった。油を熱した後、先にご飯を入れようとする瞬間に、「あれ、先ににんじんとソーセージを入れるんじゃないの」とその人は変な顔して言う。「私の家では、ご飯は最後にいれるのよ」と友達は言い続け、勝手ににんじんとソーセージを入れた。今まで自分のやってきた料理の作り方と違えば、少しおかしいと思うのは当たり前のことだと思うし、別に大切なことでもないから、「じゃあ、〇〇さんに任せるわ。私は見ているね」。実は自分の作り方で料理を作りたかったが、それよりもみんなで同じテーブルを囲み、おしゃべりしながら一緒に飲んだり食べたり笑ったりすることが大切だ。友達が作ってくれたものを食べてみれば、思っていたより美味しかった。ご飯は先に入れるか最後に入れるかということを抜きにしてみんなでパーティーを楽しむのが大事なこと。日本人の「すすり文化」も、最初はおかしいなと思ったが、気にせずにみんなで美味しくたべるのは一番楽しいものだ。こういう「であい」は私には一生忘れられない思い出になった。

最後に、人とのであいだけでなく、「日本語」とのであいもあった。国で３年間日本語を勉強していたが、日本でこそ「ほんとうの日本語」が手に入るような気がする。例えば、「おつかれさま」という言葉をベトナム人は言わない。授業で「おつかれさま」を教わったが、実際に使う場面がほとんどないので言葉以外何も感じてないのだ。しかし、日本で授業が終ったら、「おつかれさま」と言われると、一日中の疲れも吹き飛んでしまう。次に、「ありがとう」「ごめんなさい」「かわいい」という言葉も気に入っている。日本人からみれば、こういう言葉はとんでもないことにもよく言い、口癖になってしまう。それに対し、ベトナム人はそういった言葉を口にしたら、「あのひと、気遣いすぎだな」「お世辞がうまいやつ」とでも思われる場会が少なくもない。どちらが良いか悪いか判断する余裕がないが、おもしろいなあと思う。今ベトナムに帰り、「あるがとう」「ごめんなさい」といった言葉をなかなか聞かないので、なんだか物足りないと感じる。また、大阪弁とのであいも印象的だった。それを聞くと、大阪人のあたたかい心も伝わる。

私は無口なタイプなので、思うことを言葉にしない。それに、ベトナム語で自分の気持ちを言うのがより照れくさいから、相手になかなか伝えられない。だが、日本語なら言える。日本語は思いやりがある言葉だから。日本語のおかげで自分の思うこと、相手に対する気持ちを言葉にできるようになった。私には言葉に形容できないほど日本語が大好き。

「出逢いは別れの始まり」。あっという間に一年間の留学も終った。だが、別れがあるからこそ、一緒にいられる時間を大切にするべきだ。みんなと過ごす時間は楽しかった。みんなと作り合った思い出はすべて宝物だ。外国の友達、先生たち、みんなと出逢えてよかった。これから先も、新たな「であい」が始まるから、楽しんで歩んでいこう。

留学の恩恵

オレリ・ゴンザレス

交換留学生

（フランス）

大阪教育大学に来る前に、私にとって留学するのは勉強している言語を話せるようになり、文化に関する本で習ったことを自分の目で見ることであった．しかし、大教で一年間を過ごすと、留学というのはそれだけではないとよくわかってきた。

2013 年の 9 月に、2 年間勉強していたのに日本語が全然話せないまま、日本に初めて来た。到着してからの日々は毎日新たなことを習ったり、経験したりして、毎日驚嘆した。タクシーの自動ドアから日照時間まで、日本の日常のことや習慣はフランスと違うので、子供のようにもう一度生き方を習う気がした。本で色々なことを学ぶのと、自分でそういうことを経験して新しい生活に慣れるのは全然違うなぁとだんだん思うようになった。新たな経験は留学のいい点の１つと言えるであろう.

その上、一番驚いたことは、フランスと日本の大学の生活の異なることである。先生達も国際係の皆さんもいつも大学にいて学生を手伝ってくれるし、皆さんが優しくて笑顔で接してくれる。それに対しては、本当に感謝している、それも新しい経験であった.

日本の大学の生活と言えば、部活やサークルを考えるであろう。一昨年から、（琉球鼓舞いちゃりばちょーでー）エイサー隊というサークルに入っている。エイサーというのは、沖縄の盆踊りである。入った理由は踊りや太鼓の音が好きだったからだが、その新しい経験よりも大切な発見をした。それは、サークルは大家族だということである。フランスには部活などがないので、同じサークルの人との関係について全然知らなかった。したがって、このような人々と出会えて、友達になれてとても嬉しい。留学が終わっていても、帰国しても、作った繋がりが消えない。それを知ったら心が強くなる.

さらに、エイサー隊の皆さんと一緒に練習したり、公演に出たりして、自分がもう少しわかるようになった。生まれてから人の前にいると緊張するのに、公演でお客さんの前で踊ったり、時々まだきちんと話せない言語で話したりするのは仕方がないので、いくら怖くても頑張らなければならない。すると、自分にその勇気があると気を付いた。これからその力があることを意識して生き続けられる。留学のお陰で自信が少し出たと言えると思う。

日本に留学したら、日本人と日本文化のことはもちろんたくさん習うが、日本のことだけだとは言えない。留学は、色々な国の人と出会って、友達になる機会である。時々、友達と分かり合うために、相手の国の文化を教えてもらわなければならないので、色々な違う文化について習える。それと共に、世界が広くなって、新しい考え方ができるようになる。

日本人や留学生の友達と一緒に時間を過ごして、大切なことに気が付いてきた。それは、どのような国でも、皆同じ気持ちや感情を感じるということである。国によって、感情の表への出し方が異なっているが、その感情の本質は一緒である。文化や生き方が違っても、私達は同じ地球に住んでいる人間である。

手短に言えば、留学するのは言語を勉強するだけでなく、自分についても、他人についても学ぶことである。大阪教育大学で勉強できて本当に感謝している。この一年間を一生忘れられない！

日本での一年半

イ・ミナ
教員研修留学生
（韓国）

韓国の仁川空港から、日本の大阪までの飛行時間は1時間半ほど。大阪から北海道に行くよりも早い。この間、釜山に旅行に行ったときに椿島からは、対馬島が肉眼で見えた。本当に近い隣国だ。

大阪で教員研修生として一年半を住んでみて、韓国と日本は異なる点が多く、学ぶことが多々あることが分かった。

大阪のおばちゃん

大阪に住み始めたばかりの頃、デパートの地下でケーキ店の前に人が並んでいたので、よさそうだと思い私も並んだ。しかし、背後にいるおばさんが大阪弁で、私のバッグについて「めっちゃキレイな鞄やな。どこで買ったん。」と話しかけ、それとともに、店のケーキが売り切れになると一緒に惜しんで、「もうちょっと早く来たら良かったな～。」と同情の言葉を掛けてくれた。普通日本人は、迷惑だと思って他人に声をかけたり、他人のことはあまり気にしないと思っていたが、やはり大阪の人々は、韓国人と似たような傾向があることを感じた。そのおばさんの言葉には、情があり暖かく感じられた。

行列

日本人は並ぶことが本当に好きである。ある日、デパートの前に列が長く続くのを見た。その先にはきっと美味しいものがあるのだと思って私も列に並んでみた。すると、あんパンがあるだけだった。そしてデパートの地下売り場のポッキーと似たお菓子の売り場があるが、いつもデパートが開店する前から人々が並んでいて、店の外に待っている人は順番に店に入ることができる。その様に並ぶなら、余程の素晴らしい味かと思ってわざわざ並んで買ったが、私には少し高級なポッキーというだけだった。お菓子のために、なぜ列に並んで買うのか理解できないが、「限定商品」という言葉に日本人には魅力を感じるようだ。

並び方についても、待ち時間の長さ、前の人との距離を維持し、ゆったりとした余裕のある姿は、日本人の特性であると思った。

限定商品

春になると桜やいちご限定の食べ物や物があちこちに見かけるとこができる。桜の

アイスクリーム、桜味の飲み物、桜大福、桜豆乳まで。パン屋でもイチゴの限定ケーキやパンが次々出てくる。お菓子やチョコレートも冬季限定いちご味や、抹茶味などが出てきて高級チョコレートブランドとコラボレーションしたポテトチップなどが期間限定や地域限定で発売される。ビールも期間限定、数量限定、季節限定などが多く発売されている。また旅行に行くたびに、特産品の地域限定お菓子は買わずにいられない。
人の心理は、今しかないから買う。今を記念した限定商品を手に入れる。地域の特産品で作られたお菓子などはお土産にぴったりだ。どこにも限定だという話もあるが、それでも限定はいつも新しく楽しい。

土産
　日本人はどこへ行ってもお土産を買う。さらに公演に行ってもお土産を買い、テーマパークなどの遊園地に行っても必ず買う。様々な食べものと地域特産品を開発、商品化して、それらを喜んで買うことによって、経済が活性化されるようだ。友人や知人の旅行先からのお土産は、けして高価なものではないが、ここで味わうことができない限定という魅力と暖かい情が込められている。

思いやりと優しさ
　夫を関西空港で出迎えて神戸に行くリムジンバスに乗った。空港バスから降りるとき、バスと地面の間に足台が置かれていた。このような小さな配慮が顧客の笑顔を作ると考えた。デパートで道を聞いてみると親切に案内してくれたり、場所まで連れて行ってくれる場合が多かった。特に私の友人が神戸旅行をする時に、日本のおばさんに道を尋ねてみると目的地とは別の全く間違った場所にいた。するとおばさんが車を乗せて目的地まで連れて行ってくれた。靴屋では、店員がひざまずくことを見たときは、いくらか心が傷んだ。
　しかし、顧客へのサービスを確実にするという印象を受けた。これがまさに日本のサービス精神ではないかと思う。そしてすれ違う時にぶつかったり、何かを渡すとき、電話を切る時、部屋を出る時も、いつも「すみません」という。私も「すみません」が口癖のようになっており、なかなか簡単に消えないようだ。

＜リムジンバスの足台＞

清潔

夫と私が日本旅行を好きな理由は、どこを行ってもきれいだということだ。街や木は、誰かがいつも清潔に整備しており、どの家からもほとんど整備されている。田舎のどの店に行っても清潔で、ほとんどのお店やトイレは安心して利用することができる。ここでも日本人が他人に被害を与えることを嫌う「迷惑文化」を知ることができる。山や公園に遊びに行っても自分が捨てたゴミを持ち帰ることを当然に考え、自分の家の前に汚れがあることで、他の人に被害を与えるだろうとする意識が日本を清潔の国で作られたようだ。

専門

日本の商業は本当に細分化されているという感覚を受けた。細分化されているので専門的になり、専門になるにつれ一流の商品が提供される。お店を見ると、杖専門店、靴下専門店、たわし専門店、着物の靴専門店、布の専門店、ナット専門店、さらにはマッチ専門店まで、数多くの専門店がある。特に韓国は、パンとケーキを一緒に売るのに、日本ではパンとケーキの店が分かれているのを見ることができる。より細分化されてジャム専門店や、マカロンまでも専門店に分かれている。それゆえ、日本のパンとケーキはおいしいのだと思う。韓国は近所のパン屋が消えフランチャイズのパン屋が主流をなして、日本の近所のパン屋のような特色ある魅力に沿っていくことはできないようだ。工場から出たパンと手で捏ね作ったパンとは味の差が出るのが当然である。日本ではパンツアーをしたこともある。その店だけの独特のパンを見つけて通う楽しさを、韓国に帰った今はできないと思うと惜しい。

祭り

大阪に住んで京都や神戸、奈良へのアクセスが良く、非常に幸せだった。そのため、京都の時代祭り、祇園祭、大阪の天神祭、十日恵比寿祭りなどをはじめ、砂掛け祭り、南千里地域の祭りまで非常に多くの祭りに参加した。祭りは、ほとんどは伝統的な衣装を着て行進をしたり、神輿などを移動するものであり、その周辺は屋台や特産品を売る店が立ち並んでいる。特異な点は、一般の人がボランティアとして非常に積極的に参加して一般の人たちも楽しむということだ。祭りを楽しむことができるように祭りを研究し、作り上げ、そのことを商品化して、みんなで楽しむことができるものであるという点で、祭りは、日本経済の活性化に一役だけでなく、健全な地域文化を作り出して伝統を維持しており、その意味で非常に大きな意義がある。

記念

祇園祭で山鉾を回ってスタンプを取得することができ、スタンプを全部もらったら所定のプレゼントをもらえる。そして、主要鉄道駅や列車は記念スタンプがあって、

記念とすることができる。さらに大阪教育大学にも駅スタンプがあるという事実！有名なところ行くと、いつもスタンプがあり、スタンプラリーがあるところが多く、見物しながら記念をつくることができ、良い楽しさがある。

日本はどこに行ってもキャラクターがあり、最初はそのキャラクターに思い入れがなくても、キャラクター化した商品をどんどん見ていれば情が入り、かわいく見える。そしてキャラクターが入った商品を手に与えることを許可されている。名古屋城のシャチホコも実際には装飾の一部に過ぎないのに名古屋城を回りながらフォトゾーンとお土産ショップではキャラクター化されており、よく見るうちに親近感が湧き、お土産として購入してしまうのである。

伝統文化を重視

日本滞在の一年半の間、三回茶道体験の機会があった。すべての留学生を対象とした日本文化プログラムを通して体験することができた。着物を着て、じっくり茶を立てるところを見て茶道の所作を学びながら、何か世俗とは断絶された特別な感じを受けた。韓国も茶道があるが、韓国の茶道は形式より快適な中でのコミュニケーションを中心に発展されているので、日本ほど細かくして洗練されたわけではない。しかし、茶道を愛し、学ぼうとして伝授する日本人の姿は、学ぶべきである。着物も普段はよく着てないが、結婚式にのみ着る韓服に比べて着物の方が、日常生活でよく着物を見ることができる。成年の日や、卒業式にも若い人たちが好んで着ており、祭りには、浴衣を着飾った若い人たちの姿も多く見られる。そのような姿が外国人には、より新鮮で魅力的であるのだ。相撲や歌舞伎を高度な日本文化に引き上げたのを見て、韓国のシルムと仮面劇の現在の姿を振り返って見ることになる。日本の伝統文化が発展することができる最も大きな理由は、日本人の伝統文化への愛だと思う。

＜大阪国際センターの茶道の授業＞

＜大阪教育大学の剣道授業＞

人、親切

日本で得られた最大の宝は人である。ボランティア活動を積極的にしておられる方

たちを介して多くのことを学んだ。大阪大学のホストファミリーで初めて会った柴田のおばあさんは80歳を超える年齢でありながら非常に多くの活動をしておられた。お友達もたくさんおられ、お友達の日本の伝統笛コンサートと、生花展示会などを一緒に参加し、日本文化をたくさん身につけることができた。おばあさんのお宅に招待されて昼食も一緒に食べ、近所のお祭りも見物した。おばあさんはいつも私に多くの経験を与えてくださった。

大阪教育大で会ったホストファミリー市川さんの家族。小学校と中学生の娘がいる市川さんとユウさんも非常に友好的だった。家に招待され、一緒にたこ焼きを作って食べたり、奈良のキャンプ場に行ってバーベキューをした。伊勢神宮など家族の外出する時には、常に私だけでなく、私の周りの外国人の友達も一緒に誘ってくださった。山の上に住んでいる私に配慮して、いつも車での送迎もしてくださった。新年や韓国に帰って来る前には手紙も送ってくださり嬉しかった。

大阪教育大で、チューターとして縁のあったユイちゃんは非常に活発で優しく、私が本当に好きな性格だった。いつも私をお姉さんと慕ってくれ、お願いした事は快く受け入れてくれた。引っ越しを快く引き受けてくれた米田さんと家に何度も招待して美味しい日本料理をもてなしていただいた会話の先生になってくださった八木さん、いつも日本文化を詳しく用意していただいて教えていただいた上野さん、いつも親切にレポートを書く上で多くの助言を与えてくださった中山先生。この他にも感謝している人々があまりにも多い。一緒に教員研修生として来た友人たちと共に夕食を食べたり、パーティーを開くことで、山の中の孤独を和らげることができた。

＜神野さんと留学生と十日恵比寿祭り（2015.01.10）＞

＜ホストファミリーとのたこ焼きつくり＞

人と人との出会いが国と国の出会いを肯定的にするようだ。歴史と政治の問題で騒がれる低いレベルの問題は、こうしたことにおいては問題ではなかった。私たちの隣人、日本で私は多くのことを学んだと感じている。私のささやかな学びは、これから私が教える学生たちにも肯定的な学びにつながることを願い、一年半の日本での生活を終了する。

Tips for Experiencing and Enjoying Japan

エストレルヤド・エマヌウェル

教員研修留学生

（フィリピン）

When I first arrived in Japan, I am very much overwhelmed by almost everything. It was my first time to be out of my home country, and as such, my stint in Japan as a teacher training student has opened for me doors to an array of experiences and opportunities. At first it was difficult, being in a whole new environment, with new faces, new places, new food, and new culture. Not to mention, the language barrier. But as the days go on by you get to experience and enjoy Japan more and more. Meeting new friends in the university and the dormitory sure does help a lot. So how can a foreign student get to enjoy Japan? Here are some of my tips:

Learn the language. Most Japanese people shy away when it comes to conversations in English and getting around and doing stuff would almost be next to difficult if you don't know a few phrases or two. It's a good thing that part of my training as a teacher training foreign student is that I get to learn the Japanese language. Thanks to my Nihongo teachers at Osaka Kyoiku University I was able to learn the basics of Nihongo, though I wish I could be better. Equipped with your knowledge in Nihongo, no matter how little it is, will make getting around Japan a breeze.

Be a tourist. During school holidays and if there is time to spare, I make it a point to travel around many of the beautiful temples, scenic places, attractions and historical parks that dot the Japanese country. Since the Monbusho scholarship provided me with a good allowance, I did not have to worry much about money. I was able to get to Hiroshima, Tokyo, Fukuoka, Kobe, Kyoto and Kamikochi among other places during my stay in the country. Also the International Center organizes cultural field trips for International students. We had trips to Nagoya, Shikoku and Shiga and other beautiful places in Japan as well. Every place that we visit offers something new and fun to explore. It was such a treat. So don't be dorm stuck and instead go out and explore the beauty of Japan.

Eat your heart out. Experience Japan through its myriad of flavors. Japanese food is more than the traditional sushi and ramen. It also includes curry, donburi, okonomiyaki, gyoza, gyudon and the list goes on. You'd be surprised that there's an Italian dish that is only found in Japan, the Napolitan spaghetti. If you want to go more traditional you could participate in a traditional tea ceremony. The International center through one of its cultural classes organizes a classical tea ceremony for foreign students to participate to. It was very interesting and I could say is one of the highlights of my Japan food experience.

Experience their culture. Japan celebrates festivals called *'matsuris'* year-round and every locality has its own special *matsuri* or festival. The

International Center with the cooperation of organizations like Global Kashiba, host cultural immersion projects for foreign students. There were workshops for making decorations for special Japanese occasions like bamboo decors for the *tanabata* or star festival and *kadomatsu* for New Year. Participating in these events provides foreign students like me first-hand experience of the diverse offerings of culture and artistic expressions found in Japan.

Make new friends, lots and lots of friends. Being a foreign student in Japan has afforded me the chance to meet people of various nationalities and make friends with them. At the international dormitory, aside from the Japanese, I have made friends with people from Thailand, Singapore, France, Cambodia, South Korea, China, Taiwan, Morocco, Vietnam, USA and many more. Never in my life have I imagined that I would make friends with people with different nationalities and share experiences and lessons with them. We learn much from each other and help each other during times of need. Living alone in the dormitory would make its toll on you but having friends to have fun around helps a lot on getting over lonely days when you get homesick.

In the end, I could say that I had a wonderful time in Japan. My experience as a foreign teacher training student at OKU has broadened my horizon and allowed me to gain new insights on my own country as well as a broader global perspective of our world's diverse cultures. As a teacher I hope that I could share and impart what I learned during my one and a half years of stay in Japan to my students back in my country. My stay in Japan is an

experience that I will never forget for the entirety of my life and something that I would like to experience again if given the opportunity.

期待以上の留学生活

大 西　慧
（教養学科　文化研究専攻欧米言語文化コース）

とにかく留学したい。そんな気持ち一心で交換留学に挑戦しました。両親の仕事の関係上、幼い頃から海外の方々や様々な国の文化に触れる機会が多く、日本以外の国についての関心が高まっていきました。また、幼い頃に１０ヶ月間家族でアメリカに滞在していたこともあり、再びアメリカに行くことを憧れるようになりました。これらが、私の留学に対する動機付けとなった根本です。

１回生の頃から、交換留学を終えて帰国された先輩の経験談や、交換留学の説明会に参加し、留学したい意思だけが先走っていたように思います。教員免許取得も考えているため、４回生での卒業が困難であることや留学の費用などを考慮すると、留学という形で海外に行くことに意味があるのかと悩んだこともありました。しかし、学生のうちに経験できるこの留学は今しかない、留学しなかったことを後悔したくないという気持ちが次第と強くなり、交換留学への準備を本格的に始めました。２回生の１２月に選考があり、ビザの取得、提携校への書類提出、航空券の確保と、８月の出発に向けて徐々に準備が整っていきました。出発まで、不安がなかったわけではありませんが、念願のアメリカ留学への期待の方が大きく、飛行機に乗って一人で海外に行くことに対して少しも戸惑いはありませんでした。出掛けるとなると誰かの後ろについて行くタイプなので、無事にたどり着くことができるのかどうか家族や友達の方が心配していたようです。乗り換え時間を含めた３１時間の長旅を経て、これから９ヶ月間お世話になる寮に無事到着しました。私が滞在した寮は、寝室は相部屋、キッチンやリビング、洗面所を１０人で共有するタイプのところでした。私のルームメートはイギリス北部出身で、他の８人もイギリス、オーストラリア、アメリカと英語圏出身の学生ばかりでした。

留学への不安はほぼないに等しかったのですが、実際に留学生活を始めるに当たり、会話についていけない焦りと不安からホームシックになりました。理解し終えた頃には次の会話が始まっていたり、話の内容に全くついていけなかったり... 留学前の希望に満ち溢れた気持ちは薄れていきました。幸いなことに、同じ悩みを抱えていた留学生が周囲に居たことや、相談に乗ってくれたフラットメート達のサポートのお陰で、焦りと不安は徐々に消え去っていきました。授業が始まると友達も増え、課題にも終われ、サークル活動にも参加させて頂き、充実した日々のお陰で悩む時間がなくなり、毎日が本当に楽しかったです。学内や学外で行われたイベントにも多数参加したり、長期休暇を利用して友人と旅行したりと留学生活を大いに満喫することができました。

専攻していた分野が、インターナショナルスタディーズだったため、主に国際関係や環境問題、世界の文化を取り上げた講義を受講し、他にも古英語、日本の文化、世界の

音楽などを受講しました。これらの講義を通して学んだこと、また、9ヶ月間の留学生活を通して学んだことは計り知れません。そこで、最も私の考え方や知見に影響を与えた経験を取り上げたいと思います。とは言っても、どれも基本的なことかも知れません。一つ目は理解することの大切さです。留学当初、友人との会話についていけず、分からないことを聞き返すことさえためらっていた頃は、分からないことを独自で推測し結局誤った理解をしていたことが度々ありました。友人の行動を誤った方向で類推することもありました。これらは全て、言葉に発して理解しようと努めれば解決できたことです。また、講義を受けた際に、誤解が全ての争いの発端であることを学び、たとえ言語の壁があったとしても、理解しようとする姿勢だけは失ってはいけないと強く感じました。二つ目は何事も受け入れられる広い心を持つことの大切さです。留学中、頻繁に耳にした言葉があります。それは、”Don’t judge me.”です。その人のしていることなどだけを見て、その人を判断しないでという意味合いです。私は周りの目を必要以上に気にしてしまう性格なのですが、この言葉を聞いて何だか安心しました。日本に居ると、いかに周りに合わせるかが重視されているように思いますが、違って当たり前、他者と自分の基準は異なって当たり前、という感覚がとても居心地が良かったです。外見だけに囚われて人を判断するのではなく、偏見を持たない広い心を持つことの大切さに改めて気付かされました。三つ目は意見をしっかり持つこととそれを発言することの重要性です。独自の考えをしっかり持っていても、それを声に出さない限り誰も知ることができません。会話においても議論の場においても、発言しないことにはそれに参加しているとは言えませんし、何を考えているのかを理解することも勿論できません。また、自分のことを知ってもらうには発言するのが一番早いことを痛感しました。9ヶ月間という短い期間の中で信頼できる友人関係を築くには、お互いを知ること、つまり意見を発することがとても重要でした。他に学んだことも含め、これらは留学生活で得ることができた貴重な経験、思い出です。

留学を終えた今の私に出来ることは、9ヶ月間で学んだことを日々の中で実践し、多くの人に伝えることだと思います。辛いことがあって泣いたこともありましたが、それ以上に世界中にまたがる友人を含めたかけがえのない宝物に巡り合えました。留学に賛同し心の支えとなった家族、遠くに居ても見守ってくれた友人、留学の準備から最後まで補助してくださった先生方には言葉では表せないくらい感謝の気持ちでいっぱいです。

Study Abroad Report

小 島　優
（教養学科　文化研究専攻欧米言語文化コース）

初めまして、欧米所属４回生の小島優と申します。私はオーストラリア、ブリスベンのグリフィス大学に２０１４年の２月から１２月にかけ留学しました。それはとても充実した日々でした。この１０カ月は楽しいことも多くありましたが、それと同様に言語や文化の違いに悩まされることもありました。それらを留学前と留学後の自分を踏まえて振り返りたいと思います。

まず私がオーストラリアに留学した理由は単純で、英語教員を目指している自分にとって海外での生活は必要不可欠だと考えたからです。実際に、留学前の私は自分自身の英語運用能力に自信がなく、海外の文化を十分に理解していませんでした。留学を通して私は自分の英語力に自信を持つことができるようになり、オーストラリアの文化を理解して生活できるようになりました。しかしそれは、留学先で出会った人々の助けや、彼らの留学生を受け入れてくれる思いやりがなければ実現することができませんでした。

前置きが長くなりましたが、留学中の生活について述べたいと思います。グリフィス大学はとても素晴らしいところでした。大学は自然に溢れていて、様々な科目の講義が行われ、図書館にはたくさんの本が並び、勉強するには最適な場所でした。加えて、ブリスベンの中心街にはバス一本で行くことができ、友達と遊びに行くことも楽しくて、遊ぶ場所を探すことも容易でした。街自体も都会ながら自然に溢れ、図書館や美術館を多数有していて、とても住みやすい街だという印象を受けました。しかし、私がこの留学生活で最も素晴らしいと感じたことは、街の素晴らしさや大学の学習環境ではなく、出会った人々の心の温かさでした。

私は大学内の寮に住むことになり、６人の外国人と住むことになりました。グリフィス大学には留学生寮はなく、学部生と留学生が共に住むものでした。そこで私は４人のオーストラリア人、１人のケニア人とジンバブエ人との共同生活が始まりました。上に述べたとおり、留学開始直後の私の英語力は壊滅的なものであり、ネイティブスピーカーとコミュニケーションをとることは簡単なものではありませんでした。彼らの会話についていくことができなくなり、不甲斐ない思いをすることも多々ありました。そのようなときに彼らは、英語と格闘する私にいつも優しく接してくれて、英語を教えてくれたり、一緒にお酒を飲みに連れて行ったりしてくれました。また、私と同じように交換留学で来ていた香港人の４人も私の留学生活を支えてくれました。私がグリフィス大学に着いて最初に話した留学生が彼らでした。彼らは英語力がとても高く、出会ったころのコミュニケーション力は私と雲泥の差でしたが、それにも拘らず私と最初から最後まで仲良くしてくれました。

彼らもまた、私が悩んでいるときは、同じ留学生という立場から共に悩んでくれたり、楽しむときは一緒に街に出かけたりしたりして留学生活を過ごしてきました。私の留学生活はルームメイトたちや彼ら無しでは充実していなかっただろうと思います。

ほかにもオーストラリアではたくさんの素晴らしい人々に出会いました。私が自分の留学生活を思い返すときに初めに出てくるのは、私が出会った人々です。この留学を通して私が学んだことは、本を読むことの大切さ、英語の楽しさやオーストラリアという国の素晴らしさなど色々とありますが、結局一番大切なことはそこでどのような人と出会い、どのように過ごすかだと私は考えます。私は彼らと出会えたということだけで、私の留学生活は成功に終わったと思います。

オーストラリア語学研修で得たもの

直　妙
（教養学科　スポーツ専攻）

2014 年 2 月 5 日から 2014 年 3 月 16 日までの約 5 週間半、オーストラリア・グリフィス大学語学研修 Griffith English Language Institute(GELI) に参加させていただきました。まず、6 回にわたる事前講義と引率をしてくださった長谷川先生、出相先生をはじめ、様々なサポートをしてくださった国際係の皆様にこの場をお借りして感謝の気持ちを述べさせていただきたいと思います。

この語学研修は、私の人生を変えたと言っても過言ではないほど価値のあるものでした。経験することができて本当によかったと心から強く思っています。

ホストファミリーからの歓迎を受け、ブリスベンでの生活がスタートしました。ホストファミリーは最初に、この家での生活のことや通学の仕方、バスの乗り方などを教えてくれました。うまく英語を聞き取れないときは紙に単語や図を書いて、私がきちんと理解できるまで丁寧に伝えてくれました。また、私からも積極的に写真を見せながら自分のことを話しました。ホストファミリーは、一緒に生活していた 5 週間半ずっと、いつでもどんなときも、私の拙い英語を理解しようと懸命に聞いてくれ、私が理解できるまで様々な方法で話をしてくれました。それはホストファミリーだけでなく、GELI の先生方やスタッフさんたち、バスの運転手さんや道を尋ねた街の人たちもみんなです。本当に親切で、優しくにこやかに会話をしてくれました。

「どんなときでもこんなに下手な英語でもきちんと会話をしてくれる」という経験は、私に勇気と自信を与えてくれました。そして何より、誰かとコミュニケ―ションをとることがこんなにも「たのしい」と強く感じました。また、相手の話を最後まできちんと聞くことの大切さや、感情を込めて全力で話すことで相手に理解してもらえる喜びは、日本の中で日本語で生活していては気付くのが難しいことだと思います。

ブリスベンは自然が豊かで美しく、人々がのんびりと暮らしている街です。目に映るものすべてが大きくどっしりとしていて、空や海も日本で見ていたものと違うように見え、時間までもがゆっくりと流れているように感じました。また、様々な国籍や人種の人たちが共に暮らしていて、GELI のクラスにも中国・香港・韓国・ベトナム・ヨルダンなどの国の人がいました。このような環境の中で学んだのは「そういう考え

方もあるんだ」というシンプルなことでした。いろんな国籍や人種の人がいるのだから様々な考え方があるのは当然のことかもしれません。ですが、国籍などに関係なく、人それぞれ自分の考えをもっていることに改めて気づかされました。それから私は、自分のものとはちがった意見も素直に認めることができるようになりました。

GELI での授業やアクティビティのおかげで、流暢な英語を話せなくてもスポーツや音楽などを通じてたくさんの友人たちと心から一緒に楽しむことができました。「笑顔」は人と人との距離を縮める力を持っていること、美しいものや素敵なものには「美しい、素敵だ」とストレートに言葉にすることの清々しさ、表情や態度で楽しさを表現する快感など大切なことを学ぶことができました。英語のスキルも少しずつですが上がっていったと思います。言いたいことをスムーズに伝えられるようになったり、相手の言っていることを聞き取れるようになったり、英語に囲まれた生活に溶け込んでいく実感がありました。

ホストファミリーをはじめとっても親切な人たちに恵まれ、雄大で美しい自然に囲まれて過ごした 5 週間半は本当にあっという間でした。学んだことや改めて気づかされたこと、新しく発見できたことは本当にたくさんあって、それらはすべて大切なことばかりです。日々の時間はゆったりとしているのに毎日が濃くて充実した幸せな日々でした。語学研修として参加させていただいたプログラムでしたが、英語の上達はもちろんのこと、それ以外にもたくさんのものを得ることができました。ひとまわり大きくなって帰国できたと思います。

最後になりましたが、このオーストラリア語学研修で出会ったすべてのみなさま、共に参加した 10 人の仲間たちに改めて ”Thank you” と伝えたいです。

台湾交換留学について

水 落　智 美
（教養学科　情報科学専攻）

留学先の大学について

私が行った国立台湾師範大学は教育大学の中で台湾一の地位にあり、付属の言語学校の評判が高く世界中から中国語を学びに来る人たちが集まる大学でした。その上、大学の横には夜市があり、近くにも観光地があるとても賑やかな街にあります。夜中にルームメイトと気軽に夜市に夜食を買いに行ったりできる程治安も良くのびのびと生活ができました。外食の文化が発達しているので、食事は主に友人と外で買ってきて寮で食べる生活です。寮は門限がなく遠出して夜遅くに帰っても部屋に入れないという事はありません。他の大学では門限があるところや毎晩点呼をするところもあるので、台湾師範大学で良かったと思うところです。

学校生活について

寮では、留学生の部屋が隣り合っているので淋しいことはありません。いつも廊下には誰かがいて世間話をしていました。中国語が上手でない学生も多いので普段の会話は英語を使ったりもしました。言語学校でも同じで初級のクラスなどは先生も英語を使って説明をします。教科書の説明文も英語で台湾国立師範大学には英語も自然と身につけられる環境があります。

留学をして起きた特別なこと

留学生活で印象に残った事を二つ言いたいと思います。

一つ目は、友人の紹介でフットサルに連れて行ってもらった事がきっかけで、学校に関係のない現地の方々に知り合えたことです。そこで知り合った友達に別のフットサルに連れてもらい、また新しい人たちと知り合えました。このように毎日のように新しい友達が増えて行くのですごく楽しかったです。このことから思ったことは自分の趣味や特技があれば周りの友人に積極的に話せばいい縁があるということです。特にスポーツだと大勢の人と運動しながら仲良くなれるので交流パーティーのように無理に話す必要もなくリラックスして友達ができます。

もうひとつ特別な事がありました。それは学生による大規模なデモです。これは日本でも少しニュースになっていました。昔から台湾と中国の関係は複雑で仲が良くはありません。このデモは台湾政府が中国政府と人の行き来に関して自由化することに対し学生が先頭に立って反対するというものでした。そして学生が総督府、日本で言うと国会議事堂になる場所を長期間占拠し反対の意を示しました。この総督府というのが私が通っていた大

学からバスで 10 分のところにあります。学校では芸術学部の学生が描いたデモの旗が大きく掲げられ、教授は学生たちがデモに行くことに賛同しており早めに授業を切り上げることもありました。私も他の留学生とともに現場の様子を見に行きました。デモ＝暴動のイメージがあったのですが現場はとても落ち着いていたので印象的でした。他にも芸能人などの著名人が駆けつけ一緒に抗議していたところが日本と違うところだと感じました。このデモは海を越えて台湾を応援する国でも行われました。香港のデモは日本でも大きく取り上げられたニュースです。香港のコンビニでは台湾を応援する雑誌が置かれ YouTube でも応援の動画がアップされました。台湾での中国に対するデモが先ですが後に香港のデモの時は台湾も香港を応援しました。話がそれてしまいましたが、この一連の出来事の中に自分がいたという事は私に当事者という意識を強く植え付けました。恥ずかしながら今になってやっとその意識が芽生えました。

最後に

台湾は日本が大好きです。それはなぜかよく知らない人も多いと思います。私はそのことが残念に思います。中国語が話せるということで就職活動では他の学生と違う長所を企業にアピールすることができます。更に中国語文化に触れ合うことで現地の人の様子を知っている事もアピールポイントになります。是非皆さんにも台湾の魅力を知ってもらい、将来に役立てていただきたいので、台湾への留学も検討して頂きたいです。

平成 26 年度　国際教育部門　活動報告

１．日本語・日本事情教育

平成 26 年度に留学生のために開講した授業、及び受講者の内訳は下記の通りである。今年度は、受入れ人数が増加している日研生と交換留学生のための授業として「日本の伝統文化Ⅱ」、「文化交流実践研究Ⅰ」「文化交流実践研究Ⅱ」を新規開講した。

学部留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本語読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅰ	村井巻子
	日本語作文Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本語聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	若生正和
2回生	日本語演習Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅲ	中山あおい

教養基礎科目・専門科目（※日本人学生とともに受講できる授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本事情	2（前）	水・Ⅱ	長谷川ユリ
	東アジア言語文化論	2（前）	水・Ⅰ	若生正和
	国際理解	2（後）	水・Ⅱ	中山あおい
	日本科学技術史概論	2（後）	月・Ⅲ	城地茂

日本語日本文化研修留学生、交換留学生のための授業

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
中上級	日本語中上級聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	村井巻子
	日本語中上級読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅱ	長谷川ユリ、間晶子
	日本語上級漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅱ	若生正和
中級	日本語中級文法Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語中級会話Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅰ	間晶子
初中級	日本語初中級会話aⅠ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語初中級会話bⅠ・Ⅱ	2×2（前・後）	水・Ⅰ	長谷川ユリ
	日本語漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	水・Ⅱ	若生正和
初級	総合日本語a	2　（前）	月・Ⅱ	中山あおい、間晶子
	総合日本語b	2　（前）	火・Ⅱ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語c	2　（前）	火・Ⅲ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語d	2　（後）	火・Ⅱ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語e	2　（後）	火・Ⅲ	長谷川ユリ、井ノ口智佳

	日本の社会と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅲ	中山あおい
	日本の言語と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅳ	若生正和
	日本文化史Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅲ	城地茂
	日本近現代史	2　（前）	木・Ⅳ	城地茂
	大阪の文化Ⅰ、Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅳ	国際センター教員
	日本の伝統文化Ⅰ	2　（前）	月・Ⅳ	中山あおい他
	日本の伝統文化Ⅱ	2　（後）	水・Ⅰ	長谷川ユリ、池田利広
	文化交流実践研究Ⅰ・Ⅱ	2　（前・後）	集中講義	国際センター教員
	日本文化研究	2　（前・後）	集中	指導教員

交換留学生、教員研修留学生のための授業（補講）

科目名	曜日・時限	担当教員
基礎日本語	月・Ⅲ（後）	長谷川ユリ
日本の教育	水・Ⅱ（前）	中山あおい

前期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	29
研究留学生	2
教研生	8
日研生	15
交換留学生	25
計	79

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	28
研究留学生	2
教研生	8
日研生	17
交換留学生	22
計	77

前期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	35
韓国	7
台湾	6
アジア・中央アジア	12
欧・米・オセアニア	17
中東・アフリカ	0
中南米	1
計	79

後期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	33
韓国	9
台湾	2
アジア	17
欧・米	17
中東・アフリカ	0
中南米	1
計	77

(1) 日研生、交換留学生のための授業「大阪の文化」

「大阪の文化Ⅰ」「大阪の文化Ⅱ」では、大阪やその周辺の文化や歴史について、講義とフィールドワークを通して学んでいくオムニバス形式の授業であり、見学先は造幣局、くらしの今昔館、仁徳天皇陵古墳など大阪を中心にしながら、京都や奈良へも足を伸ばし、関西について広く学ぶ授業となっている。フィールドワークを効果的に行うために、それぞれの見学の前に講義を行い、学外から専門家を講師として招く場合もある。今年度も前期、後期とも観世流能楽師（シテ方）の山中雅志氏をお招きし、高安や大阪周辺を舞台にした能などについてお話しいただくとともに、前期には笛方の貞光智宣氏、後期は大鼓の高野彰氏から能楽器について体験的に教えていただいた。

(2) 日研生、交換留学生のための授業「文化交流実践研究」

「文化交流実践研究Ⅰ」「文化交流実践研究Ⅱ」は、留学生が大学や地域の人々と交流することで日本や日本人の考え方、日本の文化に対する理解を深めるだけではなく、さらに日本の学生や地域住人の異文化理解を促進することを目的に、本年度より開講された。前期は5月26日～30日に開催された国際交流週間の一環として生協学生委員会の日本人学生と協力して出身地域の料理を販売するとともに、民族舞踊を披露したり、近隣の小学生を招いて出身地の文化や言語を紹介をしたりするなど、学内外の国際交流活動を行った。後期は、大教育大学附属高校平野校舎の堀川理介教諭の協力のもと、16ヶ国28人の留学生が、高校生にそれぞれの出身地の文化や言語等を教え、交流を深めた。

(3) 日研生、交換留学生のための授業「日本の伝統文化」

「日本の伝統文化Ⅰ」は、国際センターと保健体育、美術教育、音楽教育の教員によるオムニバス授業であり、留学生は剣道、陶芸、三味線などの体験学習を通して日本の伝統文化につて学ぶ。また、茶道部の協力で、留学生は自分で作った茶碗を用いて茶道の体験学習を行い、日本人学生との交流を楽しんだ。平成 26 年度後期からは、書道を学ぶ「日本の伝統文化Ⅱ」を開講し、授業の拡充を図った。

２．修了レポート発表会

平成 26 年度の「修了レポート発表会」は 8 月 1 日と 2 月 4 日に開催され、日本語日本文化研修留学生、交換留学生、教員研修留学生が勉学、研究の成果を発表した。指導教員をはじめ、日本語科目の担当教員、チューター等の日本人学生から活発な意見や質問が出された。また、優れた発表を行った学生を選び、前期、後期の修了式において表彰した。

前期	2014/8/1 10:00～16:00	日研生	15
		交換留学生	19
後期	2015/2/4 13:00～16:30	教研生	8
		交換留学生	4

３．交換留学（受入と派遣）

受入	中国	7	26 名
	韓国	6	
	台湾	4	
	タイ	2	
	アメリカ	2	
	フランス	2	
	ドイツ	2	
	スペイン	1	
派遣	アメリカ	4	17 名
	フランス	2	
	ドイツ	0	
	スウェーデン	1	
	フィンランド	2	
	オーストラリア	1	
	台湾	1	
	韓国	6	

本学が学生交流協定を締結している海外の大学は平成 26 年度 4 月現在で 13 カ国・地域の 30 機関である。そのうち、過去 5 年間に受入実績があるのは 8 カ国・地域 21 機関、派遣実績があるのは 9 カ国・地域 10 機関である。平成 26 年度 4 月、10 月受入の交換留学生は 26 名であり、東日本大震災の影響で 23 年度 4 月の在籍数 14 名と一時的に落ち込んだ状況から順調に回復している。一方、平成 26 年度の本学から海外協定校への交換留学生派遣人数は 17 名と過去最高であり、23 年の 10 名に比べて伸びを見せている。さらに、平成 26 年度の派遣先の内訳を見ると、7 名がアジア（韓国、台湾）に留学しており、25 年までの 0～3 名と大きな違いを見せている。

交換留学生の受入れ人数は年によって変動があるが、ほぼ 20 名から 30 数名前後で推移している。一方、日本人学生の派遣は、23 年度 9 名、24 年度 14 名、25 年度 17 名と、このところ順調な伸びをみせている。国際センターで行っている日本人学生の留学支援の成果が少しずつ見られるようになったと言えよう。パンフレットや交換留学説明会などによる情報提供のほか、オフィスアワーでの留学相談、教養学科欧米言語文化講座が実施している交換留学希望者のための TOEFL-ITP への協力など、できるだけ日本人学生が留学の機会を得ることができるよう努力している。また、アジアへの留学希望者を増やすための取組みとして、今年度、教養基礎科目「韓国の言語と文化」を新規開講した。

学内選抜を経て今年度の留学が決まった日本人学生のためには、2 月 5 日と 7 月 24 日にオリエンテーションを実施し、留学までの流れ、提出書類や申請手続き、海外での安全のための注意事項、海外留学保険や在留届などについて詳しく説明した。また、渡航先別に個別指導も行った。

なお、平成 26 年度には、日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（短期派遣・短期受入れ）に、「大阪教育大学海外フィールドワーク」「大阪教育大学短期留学プログラム」が採択され、派遣学生 8 名、受入学生 12 名に奨学金が支給された。

４．日研生、教研生、研究留学生の受入

日研生は 17 名と過去最高の人数であった。カンボジア、キルギス、インドネシアなど、以前受け入れた大学の学生が継続的に本学への留学を希望していること、ミャンマー、インド、スリランカなど、受入実績のない国からの留学生が増えていることなどが注目される。また、タイの研究留学生はかつて本学の日研生であり、受入れのサイクルがうまく行った例と考えられる。

日本語日本文化研修留学生	カンボジア	3	17 名
	ミャンマー	2	
	ウクライナ	2	
	インドネシア	1	
	ベトナム	1	
	インド	1	
	スリランカ	1	
	キルギス	1	
	ロシア	1	
	ハンガリー	1	
	ドイツ	1	
	カナダ	1	
	ブラジル	1	
教員研修留学生	韓国	2	8 名
	フィリピン	2	
	中国	1	
	シンガポール	1	
	カンボジア	1	
	タイ	1	
研究留学生	中国	1	２名
	タイ	1	

５．語学研修・文化研修

国際センターが実施している語学研修・短期研修は以下の通りであり、タイのプログラム以外は教養基礎科目の「海外文化研究」として単位化されている。タイは京都教育大学のプログラムにコンソーシアム校として参加しているため、単位化されていない。

国・地域	研修期間	研修先	人数	計
タイ	2014/8/8～8/19	ラジャパット大学	5	37
アメリカ	2014/8/～9/19	ﾉｰｽｶﾛﾗｲﾅ大学ｳｨﾙﾐﾝﾄﾝ校	8	
韓国	2014/8/25 日～9/6	ソウル教育大学	5	
フランス	2014/9/2～9/26	リヨンカトリック大学	5	
オーストラリア	2015/2/5～3/15	グリフィス大学	9	
台湾	2015/3/15～3/28	国立台北教育大学	5	

アメリカ、韓国、台湾での研修は現地の小学校・中学校における教育実習が盛り込まれている。アメリカ、韓国、台湾のプログラムは JASSO の海外留学支援制度（短期派遣）に採択され、参加者には奨学金が支給された。以下、単位化されている 3 つのプログラムについて紹介する。

(1) アメリカ観察実習・語学研修

今年度も 8 月 18 日～9 月 19 日にかけてアメリカ語学研修を実施した。参加学生 8 名はアメリカの協定大学ノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）で、約 3 週間半の語学研修に参加した後、UNCW 教育学部の Dr. Walker のご協力により、小学校での 3 日間の観察実習を行った。参加学生は、教員の裁量の多い授業方法やティームティーチングなど、日本の学校教育に参考になる点を見つけ、日本とアメリカの教育について体験的に比較検討を行うとともに、習字や折り紙など、日本文化の紹介活動を行い、子どもたちとの交流を深めた。5 名の参加学生に JASSO の奨学金が付与された。

(2) オーストラリア語学研修

オーストラリアの語学研修は、今年度もブリスベンのグリフィス大学附属語学学校で実施した。このプログラムの特徴は、約 5 週間半の語学研修の間、ホームステイをしながらオーストラリアの生活を体験することである。始めはホストファミリーとのコミュニケーションがうまく行かないことが多いが、次第に慣れていき、学生の満足度は高い。英語の授業が終わったあと、カフェチャットや市内見学など、大学が提供する様々な活動に参加する学生も多い。また、他の国の留学生と仲良くなりスポーツを楽しむケースも見られ、それぞれ充実した毎日を過ごした。帰国後の発表を 4 月に行い、英語で研修の成果を報告した。このプログラムは 2 月から 3 月に実施されるため、単位は 2015 年度に与えられた。

(3) 韓国語・韓国文化体験研修

平成 26 年 8 月 25 日（月）から 9 月 6 日（土）まで、本学学生を対象に韓国語・韓国文化体験研修プログラムを実施した。ソウル教育大学の協力を受けた、約 2 週間の本プログラムには 5 人の学生が参加し、第 1 週目に基礎的な韓国語講座を受けながら韓国文化を学び、第 2 週目は引き続き韓国文化を学びながら初等学校観察実習を行った。

初等学校観察実習は、9 月 1 日（月）にフクソク初等学校、2 日（火）にシンデリム初等学校、3 日（水）にソウル教育大学附属初等学校の計 3 校を訪問して行った。シンデリム初等学校での実習は、平成 20 年度にソウル教育大学からの交換留学生として本学で学んだ金載鎬（キム・ジェホ）教諭が同校に勤務していることが縁で実現したものである。同校では参加学生 5 人が協力して日本の文化を紹介する授業をする機会をいただいた。学生たちは、日韓の授業の進め方や学校生活の相違点・共通点を発見する一方で、充実した施設や先進的な英語教育の実践の様子など、韓国の初等学校を熱心に見学し、学んでいた。

韓国文化については、学生たちが自由にソウル市内を見学するとともに、昌徳宮や水原華城などの世界文化遺産を訪問したり、韓国古典文学を現代的にアレンジした演劇を観劇したりと、現代文化と伝統文化を体験的に学習した。

本研修はソウル教育大学の協力を受けて実現した。また「大阪教育大学韓国言語文化体

験研修」として JASSO の海外留学支援制度（短期派遣）に採択され、研修参加者には奨学金が支給された。さらに、日韓文化交流基金の平成 26 年度人物交流助成（草の根交流）の対象事業として助成金を受けて実施された。

６．海外教育研修の受入・協力

国際教育部門では、協定校が実施している海外教育研修等に対する協力を行っている。平成 26 年度の受入れは以下の通りである。

海外協定校からの海外研修等受入

派遣元大学（国）	プログラム名	受入期間	参加者数（引率教員）
ﾉｰｽｶﾛﾗｲﾅ大学ｳｨﾙﾐﾝﾄﾝ校（アメリカ）	International Studies Program	2014/6/23～6/26	5 (1)
トリア大学（ドイツ）	日独教育比較体験プログラム	2014/9/11～9/25	4 (1)
ラジャパット大学（タイ）	短期プログラム	2014/10/30～10/31	10 (1)
ソウル教育大学（韓国）	韓国の教育大学海外インターンシップ受入プログラム	2015/1/13～2/7	10
忠南大学（韓国）	人文学部訪日団	2015/1/14	20 (2)

トリア大学とソウル教育大学のプログラム参加者には JASSO の海外留学支援制度（短期受入れ）、日韓文化交流基金の奨学金が支給された。ドイツからの受入れは 26 年度に初めて実施された。ソウル教育大学の場合は 26 年度で 5 年目であり、前半 2 週間は日本語の授業や教員養成課程の授業を中心に受講し、後半の 2 週間は東大阪市の小学校 2 校で観

察実習を行い、韓国の文化を紹介する実習授業も行った。小学校教員を目指す実習生にとっては貴重な経験となっており、実習先の東大阪市の小学校は韓国・朝鮮半島にルーツを持つ子どもたちが多く、児童たちも良い影響も受けていると好評である。

(1) ＵＮＣＷ海外教育研修プログラム

本学と協定を結ぶアメリカ合衆国ノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）の学生 5 名が、6 月 23 日（月）から 6 月 26 日（木）の 4 日間本学附属学校園をはじめ大阪および奈良の公立小学校、中学校、高校で研修を行った。引率教員として Dr. Brad Walker も同行した。同大学教育学部の海外教育研修プログラムの一環で、本学はプログラム実施を全面的に支援している。本学のアメリカ語学研修・学校観察プログラムも同大学の協力のもとで実施されており、双方向の交流が 10 年以上にわたり続けられている。

研修では小学校グループと中学校･高校グループに分かれ､様々な授業を観察したほか、習字や芋掘りなども体験した。参加者の中には現職教員の大学院生も含まれ、日米間の教育現場の違いについて研修先の教員と話し合う場面もあった。また、給食や休憩時間には子どもたちとの交流を楽しみ、最初は恥ずかしがっていた子どもたちも慣れるに従い積極的に英語で話しかけるようになった。参加者は「日本の先生たちは献身的に教えていてすばらしい」「子どもたちにのびのびと学ばせている」「日本で学んだことを是非アメリカで応用したい」などと感想を述べていた。

日程	訪問先	参加者数（引率教員）
6 月 23 日（月）	大阪教育大学附属幼稚園、小・中・高	5 名（1 名）
6 月 24 日（火） ～6 月 26 日（木）	奈良県三郷町立三郷北小学校	3 名（1 名）
6 月 24 日（火）	大阪府立八尾高等学校	2 名（1 名）
6 月 25 日（水） ～6 月 26 日（木）	大阪市立花乃井中学校	2 名（1 名）

(2) ソウル教育大学海外インターンシッププログラム

本学と東大阪市の小学校における約 4 週間の研修のため、平成 27 年 1 月 13 日（火）から 2 月 7 日（土）の日程でソウル教育大学海外インターンシッププログラムの学生たちを受け入れた。学生たちは、1 月 23 日（金）まで本学の授業を聴講して日本語や日本文化、日本の教育事情について学んだ後、1 月 26 日（月）から 2 月 5 日（木）まで、東大阪市立荒川小学校、太平寺小学校、長瀬北小学校でインターンシップ（観察実習）に参加した。

本学ではこの研修を 2010 年度から受け入れており、協定校であるソウル教育大学の学生たちの国際的視野の形成に貢献するとともに、実習先の小学校からも児童たちに良い影響を与えているとの評価を得てきた。さらに、本学学生の関心を韓国及び海外へ向けるのにも大きな役割を果たしている。

本プログラム前半は柏原キャンパスの教員養成課程の授業で本学学生とディスカッションをするなど日韓学生が活発に交流し相互理解を深める一方、「社会」「アジア理解教育」「英語学入門」などの講義に参加して日本の教員養成大学の教育内容に触れ、また日本語集中講座で翌週以降の小学校実習に備えた。1 月 26 日(月)からの研修後半では、上記の東大阪市内の小学校に派遣され、日本の教員の指導法や子どもとの接し方を見学するなど観察主体の実習を行う一方、韓国文化紹介の授業を行った。

なお本プログラムは「韓国の教育大学海外インターンシップ受入プログラム」として JASSO の海外留学支援制度（短期受入れ）に採択され、研修参加者には奨学金が支給された。また日韓文化交流基金の平成 26 年度人物交流助成（草の根交流）の対象事業として助成金を受けて実施された。

7. 海外広報活動

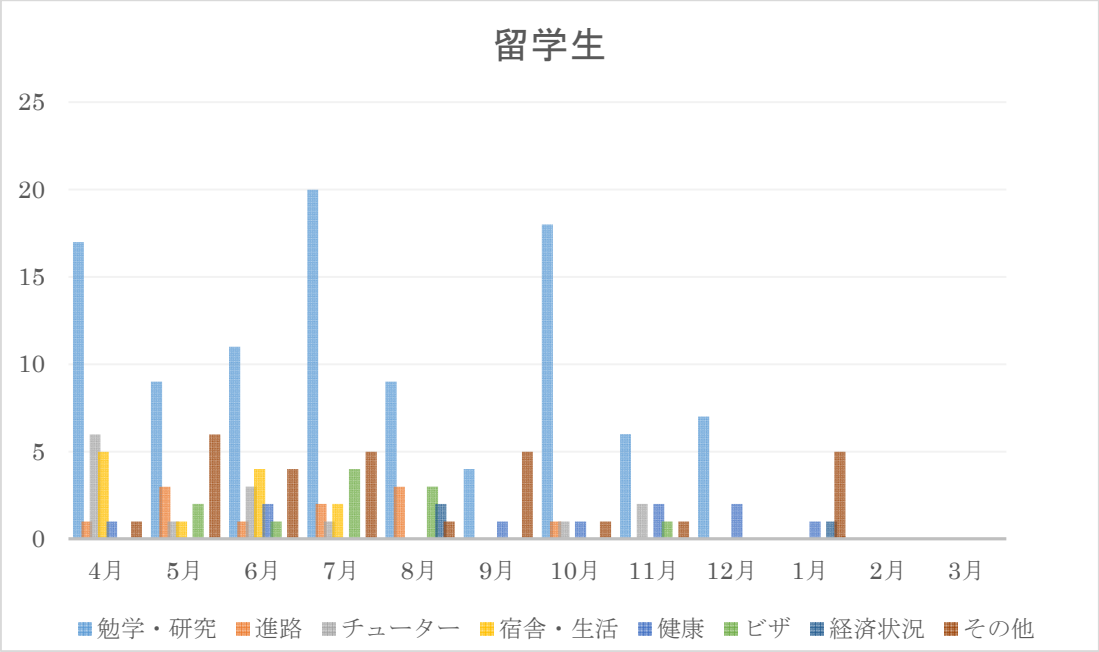
JAPAN OSAKA 留学フェア in インドネシア

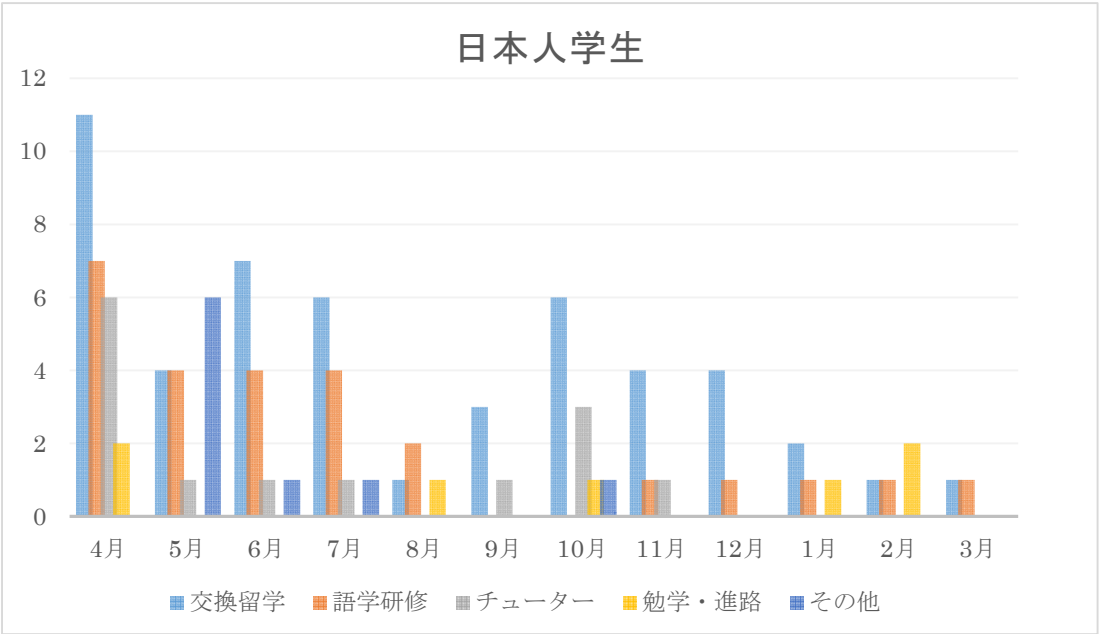
大阪の教育機関の PR と大阪の魅力を発信するプロモーション事業「JAPAN OSAKA 留学フェア in インドネシア」（主催：大阪府国際化戦略実行委員会）が 9 月 20 日（土）、21 日（日）の両日にわたって開催され、本学もブースを出展した。

このフェアは、若年者人口が多く経済的にも発展著しいインドネシアにおいて、大阪の教育機関 18 校が教育力や研究力の PR と留学生の募集活動を展開し、留学生の増加をめざすものである。20 日は大阪とインドネシアの学校間の交流や提携に向けた交流会（バンドンエクスチェンジ）をインドネシア教育大学で、21 日はインドネシアの若者に大阪留学を PR する博覧会をインドネシア工科大学で開催し、あわせて 3,800 人を超す来場者が詰めかけ、会場は熱気にあふれた。

本学からは国際センター国際教育部門の教員と事務職員 2 人が参加して魅力や特色を紹介し、留学希望者の相談に応対した。インドネシアは日本語学習者数が世界第二位であることから、日本語で質問する若者の姿も見られ、授業料や寮の有無、本学の知名度等の問い合わせがあった。

8. 相談件数（平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月）





平成 27 年度　国際教育部門　活動報告

１．日本語・日本事情教育

平成 27 年度に留学生のために開講した授業、及び受講者の内訳は下記の通りである。カリキュラム改正のため、今年度より学部生向けの日本語科目が「日本語Ⅰa」「日本語Ⅰb」「日本語Ⅱa」「日本語Ⅱb」の 4 科目となった（「日本語Ⅱa」「日本語Ⅱb」は平成 28 年度開講）。また、日研生、交換留学向けの授業「時事日本語Ⅰ」「時事日本語Ⅱ」、「教育と国際化」「日本の若者と教育」を新たに開講した。専任教員が 1 名減ったため、「東アジア言語文化論」が不開講となった。

学部留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本語Ⅰa・Ⅰb	2×2（前・後）	木・Ⅱ	長谷川ユリ
	日本語演習Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅰ	村井巻子

教養基礎科目（※日本人学生とともに受講できる授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
1回生	日本事情	2（前）	水・Ⅱ	長谷川ユリ
	国際理解	2（後）	水・Ⅱ	中山あおい
	日本科学技術史概論	2（後）	月・Ⅲ	城地茂

日本語日本文化研修留学生、交換留学生のための授業

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時限	担当教員
中上級	時事日本語Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅰ	若生正和
	日本語上級漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅳ	城地茂
	中上級聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	村井巻子
	日本語中上級読解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅰ、月・Ⅱ	長谷川ユリ、間晶子
中級	日本語中級文法Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語中級会話Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅰ	間晶子
	日本語漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅱ	城地茂
初中級	日本語初中級会話aⅠ・Ⅱ	2×2（前・後）	月・Ⅲ、月・Ⅰ	長谷川ユリ
	日本語初中級会話bⅠ・Ⅱ	2×2（前・後）	水・Ⅰ、木・Ⅰ	長谷川ユリ
初級	総合日本語a	2　（前）	月・Ⅱ	長谷川ユリ
	総合日本語b	2　（前）	火・Ⅱ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語c	2　（前）	火・Ⅲ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語d	2　（後）	月・Ⅱ	長谷川ユリ
	総合日本語e	2　（後）	火・Ⅱ	長谷川ユリ、井ノ口智佳
	総合日本語f	2　（後）	火・Ⅲ	長谷川ユリ、井ノ口智佳

	日本の社会と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅲ	中山あおい
	日本の言語と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅳ	若生正和
	日本文化史Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	金・Ⅲ	城地茂
	日本近現代史	2　（前）	木・Ⅳ	城地茂
	教育と国際化	2　（前）	月・Ⅳ	中山あおい
	日本の教育と若者文化	2　（後）	月・Ⅳ	中山あおい
	大阪の文化Ⅰ、Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅳ	国際センター教員
	日本の伝統文化Ⅰ、Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅴ、水・Ⅰ	中山あおい他
	文化交流実践研究	2　（前・後）	集中	国際センター教員
	日本文化研究	2　（前・後）	集中	指導教員

教員研修留学生のための授業（補講）

科目名	曜日・時限	担当教員
日本の教育	水・Ⅱ（前）	中山あおい

前期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	24
研究生	1
教研生	6
日研生	17
交換留学生・特別聴講生	36
計	84

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	24
研究留学生・研究生	2
教研生	7
日研生	16
交換留学生	31
計	80

前期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	24
韓国	14
台湾	5
アジア・中央アジア	19
欧・米・オセアニア	19
アフリカ	1
中南米	2
計	84

後期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	26
韓国	5
台湾	5
アジア	25
欧・米・オセアニア	16
アフリカ	1
中南米	2
計	80

(1) 日研生、交換留学生のための授業「大阪の文化」

「大阪の文化Ⅰ」「大阪の文化Ⅱ」は、本学が大阪にあるという特色を生かし、大阪やその周辺の文化や歴史について、講義とフィールドワークを通して学んでいくオムニバス形式の授業である。見学先は大阪歴史博物館、大阪くらしの今昔館、仁徳天皇陵古墳、インスタントラーメン発明記念館等で、フィールドワークをより効果的に行うために、それぞれの見学の前に講義を行った。今年度は「大阪の文化Ⅱ」で、健康生活科学講座の碓田智子教授に「日本の住まいと文化」についてお話しいただき、日本の住居に関する知識を得た上で、大阪くらしの今昔館の見学をすることができた。

(2) 日研生、交換留学生のための授業「日本の伝統文化」

「日本の伝統文化Ⅰ」は、国際センターと保健体育、美術教育、音楽教育の教員によるオムニバス授業として開講されたもので、留学生は三味線、剣道、陶芸などを体験する。平成 26 年度より、芸術講座の協力のもと、書道を基礎から学ぶ「日本の伝統文化Ⅱ」を新たに開講した。漢字やかなの書き方から始め、年賀状や色紙の作品を書き、最後には大きな筆で書く試みも行った。受講した留学生からは、「始めは難しかったが、一回だけの体験ではなく、続けて学べるところが面白かった。色々な書き方を学んで楽しかった」などの感想が寄せられ、好評であった。

２．修了レポート発表会

平成 27 年度の「修了レポート発表会」は、前期は修了者の人数が 43 名と多かったため、8 月 6 日、7 日の 2 日に分けて行われ、後期は 2 月 5 日に開催された。日本語日本文化研修留学生、交換留学生、教員研修留学生が勉学、研究の成果を発表した。指導教員をはじめ、国際センター教員、日本人学生から活発な意見や質問が出された。また、優れた発表を行った学生を選び、前期、後期の修了式において表彰した。

前期	2015/8/6 9:30～15:45 2015/8/7 9:00～16:00	交換留学生	26
		日研生	17
後期	2016/2/5 9:00～12:15	交換留学生	8
		教研生	5

３．交換留学（受入と派遣）

受入	中国	8	40 名
	韓国	5	
	台湾	7	
	タイ	4	
	ベトナム	4	
	アメリカ	2	
	オーストラリア	3	
	ドイツ	4	
	フランス	3	
派遣	アメリカ	1	9 名
	オーストラリア	2	
	フランス	2	
	ドイツ	1	
	スウェーデン	1	
	フィンランド	1	
	韓国	1	

交換留学生の受入人数は、平成 26 年度の 26 名から 40 名と大幅に増加した。新たにベトナムの大学 2 校と協定を締結したこと、ヨーロッパ、オーストラリアの学生が増えたことなどが主な原因と考えられる。また、今年度より、韓国忠南大学の「1 セメスタープログラム」が始まり、このプログラムの参加学生 5 名を加えると、協定校からの受入人数は

45 名にのぼる。一方、日本人学生の派遣は、このところ順調な伸びをみせていたが、26 年度の 17 名から 9 名に減少した。昨今の中国や韓国との関係の悪化、海外で頻繁に起こるテロなどの不安要因に影響を受けたと考えられる。

今年度は、日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）に「グローバルな視野をもつ教員を育成するための教育観察実習プログラム」「大阪教育大学留学生関西魅力発見プロジェクト」が採択され、派遣学生 4 人、受入学生 27 人に奨学金が授与された。また、派遣学生 2 名に「トビタテ！留学 JAPAN」の奨学金が、3 名にその他の奨学金が支給された。

４．日研生、教研生、研究留学生の受入

日本語日本文化研修留学生（日研生）の受入れ人数は 16 名であり、過去最高であった 26 年度に次ぐ人数となっている。このうち、大使館推薦は 15 名、大学推薦は 1 名である。20 年度に初めて受け入れたカンボジアの王立プノンペン大学からは、これまでも何回か来ているが、今年度は 6 名（うち 1 名は他大学）と、他の国に比べて特に人数が多かった。これは先輩から話を聞いて本学を希望したためで、本学の日研生プログラムの成果の 1 つと言える。

日本語日本文化研修留学生	カンボジア	6	16 名
	インドネシア	2	
	インド	1	
	ミャンマー	1	
	ベトナム	1	
	フランス	1	
	ポーランド	1	
	ウクライナ	1	
	クロアチア	1	
	チリ	1	
教員研修留学生	インドネシア	2	８名
	シンガポール	1	
	ブラジル	1	
	サントメプリンシペ	1	
	リトアニア	1	
	韓国　※10 月より	1	
	タイ　※10 月より	1	
研究留学生	ドイツ	1	1 名

５．語学研修・文化研修

大阪教育大学で実施している語学研修・文化研修は、平成 25 年度より一部のプログラムを除き単位化され、出発前の事前講義の受講、帰国後の発表を含む全ての条件が満たされた場合、教養基礎科目の「海外文化研究」の 2 単位が与えられるようになった。また、平成 27 年度は、ドイツ、フランス、アメリカ、オーストラリア、台湾のプログラムが日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定派遣）に採択され、一部の参加者に奨学金が付与された。

国・地域	研修期間	研修先	人数	計
韓国	2015/5/10-5/16	大邱韓医大学	1	46
ドイツ	2015/8/2-8/30	エアランゲン大学	3	
フランス	2015/8/30-9/30	リヨンカトリック大学	3	
アメリカ	2015/8/17-9/25	University of North Carolina Wilmington	15	
オーストラリア	2016/2/10-3/20	Griffith University	11	
台湾	2016/3/8-3/20	国立台北教育大学	4	

(1) アメリカ観察実習・語学研修

本年度も研修先は本学と協定を結ぶアメリカ合衆国ノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）で、参加学生 15 名は 4 週間半の英語研修の後、近隣の小学校において 2 日間の観察実習を行った。また、本年度はホーム・スティを実施し、参加者は 1 ヶ月以上をアメリカの家庭で過ごすことにより､アメリカの生活スタイルや文化を体験することで、アメリカへの理解を深めた。

現地の学校での観察実習では、日米の教育について様々な観点から比較するとともに、日本の踊りや遊びなどの文化紹介を行い、小学生との交流を図った。また帰国後は、報告会において、それぞれが研修の成果を発表した。

なお、本研修は日本学生支援機構の海外留学支援制度（協定派遣）「国際的な視野をもつ教員を育成するためのアメリカ教育観察実習プログラム」に採択され、8 名の参加学生に JASSO 奨学金が付与された。

(2) オーストラリア語学研修

27 年度もブリスベンのグリフィス大学附属語学学校で実施した。プログラムの内容は、約 5 週間半の語学研修の間、ホームステイをしながらオーストラリアの文化を体験することである。ホストファミリーとのコミュニケーションは、始めはうまく行かないこともあるが、次第に慣れてホームステイ先の家族との交流を深めていく様子が見られる。英語の授業の他に、大学が提供する「カフェチャット」や「オーストラリアの食物紹介」等の様々な活動や近隣地域の見学旅行にも参加することができる。今年度は、最後の 1 週間に特別プログラムが組まれ、ブリスベンの歴史、アボリジニー、オーストラリアの大自然について学んだ。帰国後の 4 月に発表を行い、次年度に単位が与えられる。本研修は日本学生支援機構の海外留学支援制度（協定派遣）「オーストラリア短期語学・文化研修プログラム」に採択され、7 名の参加学生に JASSO 奨学金が付与された。

６．海外教育研修の受入・協力

平成 27 年度に実施したプログラムは以下の通りで、全てのプログラムが日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（協定受入）に採択され（タイのプログラムはコンソーシアムの基幹校である京都教育大学が申請)、参加者には奨学金が付与された。

派遣元大学（国）	プログラム名	受入れ期間	参加者数(引率教員)
UNCW（アメリカ）	International Studies Program	2015/6/22 ～2015/6/26	11 名（2 名）
UNCW（アメリカ） EdUHK（香港）	School Internship and Cultural Exchange Program (SICEP)	2015/7/6 ～2015/7/18	7 名
ラジャパット大学(タイ)	短期プログラム	2015/7/15 ～2015/7/16	8 名（1 名）
エアランゲン・ニュルンベルク大学（ドイツ）	日独教育比較体験プログラム	2015/9/3 ～2015/9/18	1 名
ソウル教育大学（韓国）	グローバルインターンシップ	2016/1/18 ～2016/2/12	7 名

(1) ＵＮＣＷ海外教育研修プログラム

本学と協定を結ぶアメリカ合衆国ノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）の学生 11 人及び引率教員 2 人が、6 月 22 日（月）から 4 日間にわたり本学附属学校園をはじめ、大阪および奈良の公立小学校・中学校、高校で学校観察研修を行った。これは同大学教育学部の海外教育研修プログラムの一環で、本学はその実施に際して全面的に支援している。本学のアメリカ語学研修・学校観察プログラムも UNCW の協力のもとで実施されており、双方向の交流が 10 年以上にわたり続けられている。

今回は小学校グループと中学校・高校グループに分かれ、様々な授業を観察したほか、習字や琴・尺八なども体験した。参加者の中には現職教員の大学院生も多く含まれ、日米間の教育現場の違いについて研修先の教員と話し合う機会もあった。さらに、奈良の公立小学校では、すぐ近くに建設されたオープン間近の給食センターの施設見学にも参加し、、給食や昼休み等の休憩時間には児童との交流を楽しんだ。

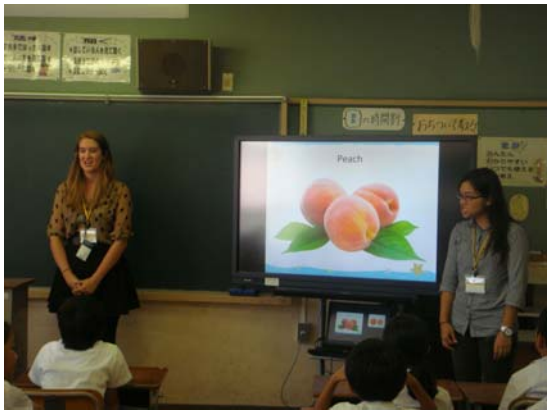
6 月 26 日（金）には国際センター長である高橋登教授（学校教育講座）の授業に参加し、本学の大学院生や研究生などと日米の教育制度について活発に意見交換した。研修を終えた参加者からは「日本の学校の『掃除の時間』は素晴らしい」「子どもたちにのびのびと学ばせている」「日本で学んだことを是非アメリカで応用したい」などの感想が寄せられた。

日程	訪問先	参加者数（引率教員）
6 月 22 日（月）	大阪教育大学附属幼稚園、小・中・高	11 名（2 名）
6 月 23 日（火） ～6 月 25 日（木）	奈良県三郷町立三郷北小学校	6 名（1 名）
6 月 23 日（火）	大阪市立花乃井中学校	5 名（1 名）
6 月 24 日（水）	大阪府教育センター附属高等学校	
6 月 25 日（木）	大阪府立八尾高等学校	
6 月 26 日（金）	奈良県三郷町立三郷北小学校	11 名（2 名）

⑵ SICEP

本学の協定校のアメリカ・ノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）及び中国・香港教育学院の学生を受入れ、7 月 6 日～7 月 17 日の日程で、「School Internship and Cultural Exchange Program （SICEP）」を実施した。このプログラムは、日本の教育について学ぶことを通じて日本に対する理解を深め、近隣の小・中学校での観察実習や研究授業を体験することによりグローバルな視点を持つ人材を育成することを主な目的としている。日本語や日本語学以外の専攻の学生でも参加できるように全て英語で実施し、本学の日本人学生も通訳などを担当するチューターとして協力した。

７名の研修生は、本学で様々な講義を受講し、日本の教育や英語教育について学んだ。学校教育講座の水野治久教授の講義「心理学特殊実験演習」では、日本人学生が英語で日本の教育制度や学校文化に関する発表をしたあと、アメリカ・香港との教育制度との違いについてディスカッションを行った。また、本学の附属平野小学校・中学校で観察実習を行い、岸和田市立中央小学校では３年生と４年生のクラスに分かれて母国の紹介や英語の授業を行い、児童たちと交流した。この他にもホームステイや本学のクラブやサークル活動の見学も行い、約 2 週間の研修を終えた。研修に参加した学生は、「日本では、小学校の時から皆で共に学ぶ姿勢が身についている」「児童・生徒や大学生は一生懸命に勉強やクラブ活動で努力している」と感想を述べた。



７．海外広報活動

キルギス留学フェアに参加

11 月 3 日、4 日に開催されたキルギス共和国日本人材開発センター主催の留学フェアに参加した。中央アジアの国キルギスはまだ日本ではあまり知られていない国だが、本学では平成 19 年よりほぼ毎年国費留学生を受け入れている。キルギスでは、日本の戦後の経済発展、武道や茶道などの伝統文化、アニメなどのポップカルチャーを通じて日本に親近感を抱き、日本への留学を目指す人が年々増加中である。11 月 3 日にはキルギス総合大学で、11 月 4 日にはビシケク人文大学でフェアが行われ両日で合計約 650 人の来場者があった。本学ブースへの参加人数も約 200 人と、関心の高さを物語っている。

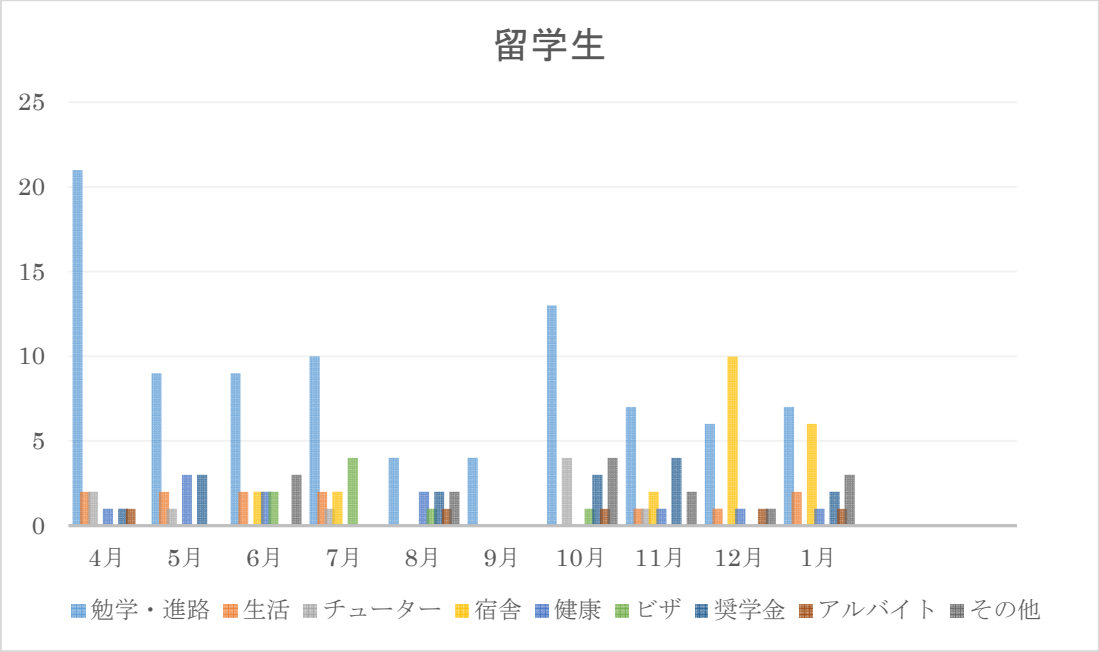
８．交流協定の締結

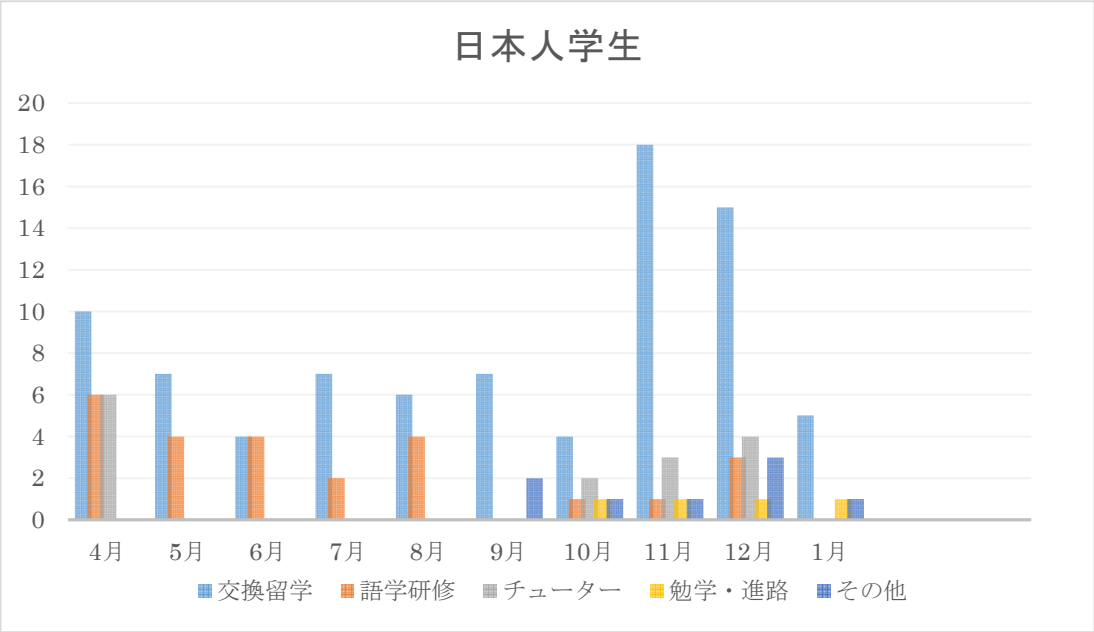
キルギスのビシケク人文大学と学術・学生交流を締結

11 月にキルギスのビシケク人文大学と学術・学生交流協定を締結した。中央アジアの国としては初めての協定校である。本学で研修を受けた国費の教員研修留学生が、帰国後にビシケク人文大学日本語学科の教員となったことがきっかけで、大使館推薦の日研生が数多く本学への留学を希望するようになり、本学との良好な関係が築かれてきた。11 月初旬にキルギスで開催された留学フェアに参加する機会を利用し、東洋国際関係学部の氏原名美日本語学科長と協定締結に向けて準備を進めた。

ビシケク人文大学は、ソビエト社会主義共和国連邦の時代、1979 年にフルンゼロシア語・ロシア文学教育大学として設立された。キルギス共和国独立後、1992 年に言語・人文科学国立大学に変更され、1994 年にビシュケク人文大学になった。現在の正式名称は、クセイン・カラサエフ名称ビシュケク人文大学で、キルギスで最も権威のある国立大学の一つである。東洋国際関係学部をはじめ 9 学部あり、学部・大学に 28 の専攻がある。このほかに、4 つの研究所、1 つのカレッジ（単科大学・専門学校）、1 つのリツェイ（学習院）、5 つのセンターがある。大学院、学部、予備教育部門合わせて約 6,000 人（うち留学生 350 人）が学んでいる。キルギス独立後の 1992 年に日本語教育が開始し、キルギスの日本語教育の重要な拠点となっており、今後の活発な学生交流が期待される。

９．相談記録（平成 27 年 4 月～平成 28 年 1 月）





平成 26 年度 国際事業部門活動報告

１．国際会議等

第 5 回国際センターシンポジウムを開催

第 5 回国際センターシンポジウム「教員養成大学における国際化―アジアとの学生交流を中心に―」を 11 月 12 日（水）に柏原キャンパスで開催し、学生、留学生、教職員ら約 140 人が参加した。

栗林澄夫学長のあいさつの後、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の米川英樹理事による基調講演「日本における留学生受け入れ―日本の高等教育における真の国際化を目指して―」でシンポジウムが始まった。米川理事は、日本の高等教育における留学（派遣・受け入れ）の歴史的推移、現状を世界の動きを含めて概観し、加速するグローバル化の中で大学が主導する留学の意義を強調した。

続いて、「ベトナムにおける日本語教育と留学～高まる交流への期待～」をテーマに、ハノイ大学日本語学部副学部長 Pham Thu Huong（ファム・トゥー・フオン）氏と国立ホーチミン市師範大学日本語学部学部長 Cao Le Dung Chi（カオ・レ・ユー・チー）氏がプレゼンテーションを行った。両氏は過去に本学で日本語・日本文化研修留学生として学んだ経験があり、Pham Thu Huong 氏は「日本企業の活発なベトナム進出を背景に、日本語が外国語学習の 8 位を占め、日本における外国人留学生に占めるベトナム人の割合は 3 位まで上昇している」と述べ、両国の懸け橋となる留学生への期待を語った。Cao Le Dung Chi 氏は、大学の日本語学部の発展の歴史と教育内容を詳しく報告した。

次に「グローバル時代の先駆者たち」と題して、北海道教育大学旭川校准教授のキム・ヒョンジン氏と、本学国際センター教授の城地茂氏が登壇した。キム・ヒョンジン氏はかつて研究留学生として本学大学院に在学しており、この留学体験が、今の大学教員としての仕事における 3 つの柱「韓国のことを伝える」「世界の人々とつながる」「日本について教える」として生かされていると語った。城地茂氏は、本学の協定校でもある北京師範大学大学院への留学経験を、研究者としての出発点と位置づけ、今後留学をめざす学生に向けて「留学の際は十分な準備が必要」と語りかけた。

この後、講演者全員によるパネルディスカッションに移り、「グローバル人材」と「留学」をキーワードに、「グローバル化する世界で有用な人材とはどのようなスキルを備えているか」「留学のもたらす効用とは何か」など活発な議論が展開された。

最後に伊藤敏雄国際センター長が閉会のあいさつを行い、シンポジウムは本学の国際化あるいはグローバル化への大きなヒントを与えて閉幕した。

２．国際教員研修

2014 年度課題別研修「英語圏サブサハラアフリカ理科授業改善」コースを実施

JICA（独立行政法人国際協力機構）研修受入事業の平成 26 年度課題別研修「英語圏サブサハラアフリカ理科授業改善」を、9 月 4 日から 9 月 26 日にかけて実施した。この事業は国際貢献の一環として実施しているもので、今年は英語圏アフリカの 9 か国（ウガンダ、エチオピア、ガーナ、ケニア、ザンビア、スワジランド、ナイジェリア、マラウィ、南アフリカ）から国家教育機関の専門官、指導官、指導主任など 16 人が参加した。

研修では、日本の初中等理科教育の現状を理解するため、学内での講義だけでなく、小・中・高等学校の授業見学や、教育委員会、教育センターの視察をした。

プログラムの最後には、研修の成果を踏まえ、研修員がそれぞれ授業案を作成し、一部の研修生は大阪府立生野高校で、他の研修生は相互に生徒役になり模擬授業を行った。

閉講式では、研修員の代表が研修の感想や今後の意気込みを語り、本学と JICA に対し謝辞を述べた。

３．海外広報活動

「JASSO 主催　日本留学フェア 2014（タイ）」に参加

8 月 29 日（チェンマイ）および 8 月 31 日（バンコク）に開催された独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）主催の「日本留学フェア 2014（タイ）」に参加した。チェンマイの会場には日本から 48 大学、バンコクの会場には 89 大学がブースを設けたが、本学は両日とも会場にブースを出し、タイ人通訳の助けを借りながら、タイの生徒・学生たちに大阪教育大学の紹介に努めた。JASSO の発表によると、来場者数はチェンマイが 676 名、バンコクが 2,909 名と大変な盛況ぶりであった。日本留学に関心をもつ生徒・学生は、経済や工学、情報関連に主に興味を示していたが、本学の協定校でもあるラジャパット大学（タイの教員養成系大学 40 校からなるコンソーシアム）の学生らが本学のブースを訪れ、熱心に話を聞いてくれた。今後ともタイからの正規生（学部生・大学院生）を増やすべく、このような機会を積極的に利用していきたい。

４．海外研修受入

JASSO 海外留学支援制度（協定受入）「日独比較教育体験プログラム」

本学の協定校であるトリア大学（ドイツ連邦共和国）日本語学科の学生が「日独教育比較体験プログラム」に参加した。JASSO の留学生交流支援制度に採択されたもので、4 人の学生に奨学金（8 万円）が授与され、自費参加の学生とあわせて 5 人が 9 月 10 日から 9 月 26 日まで研修を受けた。

研修は、学生の日本語能力向上のため、日本語で進められた。はじめに「日本の小学校」および「日本の中学校における英語教育」の講義を受けたあと、富田林市立第三中学校、富田林市立東条小学校、富田林市立喜志西小学校を訪問し、授業観察と研究授業を実施した。

研究授業は「ドイツの文化紹介」を、小学校では日本語、中学校では英語を使って行った。内容は児童・生徒にわかりやすく、興味がもてるようにと「ドイツにおける日本のアニメ・漫画」「ドイツの小学生」「ドイツの食べ物」そして「ドイツ語から日本語に入った外来語」等のトピックを取り入れた。また、週末を利用して山本能楽堂と上方浮世絵館を訪れ、日本の伝統文化にも親しんだ。

研修中は、ドイツに関心をもつ本学の学生たちがチューターとして常にサポートし、若手の事務職員とも交流し、日本人学生にとっても国際交流、異文化理解の観点から有意義なものとなった。

５．協定校などの来訪

ロンドン大学教育研究所のフェラーリ上級講師による特別講演会を開催

本学が学術交流協定を締結しているロンドン大学教育研究所（IOE）のテジェンドラ・フェラーリ上級講師（Tejendra J. Pherali Ph.D.）による特別講演会（国際センター・英語教育講座共催）を 10 月 22 日（水）、柏原キャンパスで開催した。毎年恒例となっている IOE 講師による講演会は、様々なテーマで「教育」を問い直すヒントを与えてくれる貴重な機会となっている。

フェラーリ上級講師はネパール出身で、研究分野は「紛争と教育」と「国際開発と紛争後の平和構築」を中心に、「グローバリゼーション」「民族」「アイデンティティ」そして「政治運動」にも関心を寄せている。今回の講演 “Education, Conflict and Peacebuilding: Re-Envisioning Education in Post-Conflict Societies”「教育・紛争・平和構築：紛争終結後の社会における教育の再構築」では、紛争が教育に与えるダメージとそこからの復興を「グローバリゼーション」「民族」「ジェンダー」「アイデンティティ」そして「政治」といった観点から概観した。そのうえで、具体的な事例として「ネパール」と「カンボジア」を取り上げ、紛争後の教育再構築の実情とその問題点を指摘した。　参加者の学生は「英語で聞くのは難しかったですが、とても有意義な講演会だと思いました」と話していた。

平成 27 年度 国際事業部門活動報告

１．国際会議等

第 6 回国際センターシンポジウムの開催

「CLIL 授業創りと教師の授業力 - フィンランド（EU）の実践例から - 」

国際センターシンポジウム「CLIL 授業創りと教師の授業力 - フィンランド(EU)の実践例から - 」を 10 月 25 日（日）に天王寺キャンパス・ミレニアムホールで開催した。

近年、ヨーロッパで注目されている CLIL（Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型学習）は、理科や社会といった教科や異文化理解などのトピックを「外国語（英語）」を用いて学ぶ授業方法で、英語の実践力を伸ばす指導・学習法である。本学第二部と大学院実践学校教育専攻で実施している北欧教育実習では、この授業方法に取り組んでいる。

同シンポジウムは、申込開始後すぐ定員の 100 人に達する盛況ぶりで、小学校の現職教員や教員を目指す学生、大学教員、英会話学校関係者など英語教育に関心をもつ人々が参加した。

栗林澄夫学長のあいさつの後、第一部では、フィンランドのユバスキュラ大学 応用言語研究センターCALS 所長で、CLIL 研究の第一人者であるタルヤ・ニクラ教授が、フィンランドにおける CLIL 発展の経緯やその効果と課題について講演した。続いてフィンランドのコルテポーヤ小学校のクリスティーナ・スキナリ教諭が、自らが実践する CLIL の授業を、自身が博士課程で研究した成果を基礎に「教師と生徒の役割の変化」に着目して紹介した。

第二部では、日本における CLIL をテーマに、研究発表が行われた。大阪教育大学の柏木賀津子教授による、小学校英語における CLIL に関する発表に続き、同大大学院生の岩本哲也氏と森下祐美子氏が、北欧教育実習での CLIL 授業の様子を紹介した。次に宇都宮大学の山野有紀講師が、日本の小学校外国語活動における CLIL 実践の可能性について提案した。最後に、奈良教育大学の佐藤臨太郎教授と同大大学院生の泉谷忠至氏が「高校英語授業における日本の教師の L1-L2 使用－教師の信条と実践のギャップ」をテーマとして発表を行った。

質疑応答のコーナーでは、第一部と第二部を合わせ、CLIL 全般に関する質問が出され、パネリストたちと活発なディスカッションが交わされ、CLIL の日本の学校における導入・活用に大きな可能性を示しつつ、幕を閉じた。アンケートでは、「CLIL の実践例がたくさん紹介されていて勉強になった。大阪まで来た甲斐があった」「CLIL に関して理解が深まったので、次回はより実践的な研修会を開いてほしい」「CLIL 先進国フィンランドでも常に検証を続けている姿勢が印象的だった」等の感想が寄せられた。

２．海外広報活動

「日本留学フェア」は、日本への留学を志す高校生や大学生と、留学生獲得を目指す日本の大学の出会いの場であり、本学では、アジアを中心に活動している。平成 27 年度は、下記の留学フェアに参加した。

(1) 台湾（高雄・台北）留学フェア

7 月 18 日（土）19 日（日）開催

アジアでも有数の親日的である台湾では、毎年留学フェアに参加している。南部最大の高雄市と台湾最大の都市である台北市で行われ、44 名が本学ブースを訪れ、熱心に聞き入っていた。

(2) 韓国（釜山・ソウル）留学フェア

9 月 12 日（土）13 日（日）開催

韓国での留学フェアでは、日本への留学を希望するたくさんの学生が本学ブースを訪れ、それぞれ熱心に説明者の話に耳を傾けていた。昨今の日韓の交流には、相互に誤解が生じていたと報道されていたが、留学熱は相変わらずで、90 名が本学ブースを訪れた。

(3) ベトナム（ハノイ・ホーチミン）留学フェア

10 月 31 日（土）11 月 1 日（日）開催

ベトナムのハノイ・ホーチミンで行われた留学フェアに参加した。ベトナムは近年著しい経済成長を続けており、多くの日系企業が進出している。それに伴い、日本留学への需要も高まっており、それを証明するように、留学フェアはたくさんの来場者で賑わった。両日とも来場者が 1,400 名を超える盛況ぶりで、本学のブースにも 87 名の参加者が訪れ、教職員の話に熱心に聞き入っていた。

３．学生の海外研修

JASSO 海外留学支援制度（協定派遣）「ドイツ・フランス文化研修　－　芸術家と出会うフィールドワーク」

ドイツ派遣 3 名：8 月 2 日～8 月 30 日、フランス派遣 3 名：8 月 30 日～9 月 30 日

本研修「ドイツ・フランス文化研修　－　芸術家と出会うフィールドワーク」は、JASSO 海外留学支援制度（協定派遣）に採択され、参加学生は奨学金（8 万円）を給付された。

学生たちはドイツ（トリア大学）とフランス（リヨンカトリック大学）の 2 つの協定校で実施されている語学研修に参加して、ドイツあるいはフランス出身の芸術家をひとり選び、独自のフィールドワークを含む徹底した調査を行った。

学生らは、集中講義「海外文化研究」を履修し、１．芸術家のプロフィールと時代背景の調査　２．フィールドワークの準備　３．語学研修　４．フィールドワークの実施　５．帰国後の成果発表　という手順で研修を行った。

参加学生はこのプログラムへの参加を通じて、単なる語学研修にとどまらない、海外での調査研究を単独で行うという体験をし、「調査ツールとしての外国語」を実践することができた。同時にインターネットで簡単に得られる情報を超えて、ドイツ・フランスの文化に深く親しむという成果を得た。（写真左：トリア大学、写真右：リヨンカトリック大学）

４．海外研修の受入

(1) JASSO 海外留学支援制度（協定受入）「日独比較教育体験プログラム」

国際センターは、協定校のエアランゲン・ニュルンベルク大学（ドイツ連邦共和国）から学生１人を受入れ、9 月 3 日（木）～9 月 18 日（金）の日程で「日独教育比較体験プログラム」を実施した。

このプログラムは、ドイツの大学の日本語学習者を対象に、日本の教育と文化について、小学校での観察実習や研究授業と文化施設（博物館や能楽堂等）の訪問を通じて、理解を深めてもらうことを目的としている。日本学生支援機構の留学生交流支援制度（協定受入短期研修・研究型）にも採択され、研修参加者に奨学金（8 万円）が支給されている。

参加学生は講義「桜と日本人」「大阪の歴史」そして「映画に見る日独文化交流史『バルトの楽園』」を受講し、エクスカーションとして大阪くらしの今昔館と山本能楽堂の見学、大阪城公園散策に参加した。

9 月 15 日（火）には富田林市立東条小学校を訪れ、外国語活動を観察し、2、3、6 年生のクラスで研究授業「ドイツの紹介」をすべて日本語で行った。2、3 年生の授業ではドイツの季節、建物・町並み、偉人、製品、食べ物等を紹介することに加えて、『ブレーメンの音楽隊』（日本語訳）を朗読して、子供たちを喜ばせた。

参加学生はおよそ 2 週間のプログラムを終え、「日本語の力がついたし、日本の学校と伝統文化についてよくわかり、面白かった。ぜひもっと日本語を学んで、将来は日本でバレエの先生になって子供たちにレッスンしたい」とコメントした。

同プログラムはすべて日本語で実施され、本学の日本人学生もチューターとして研修をサポートした。学生の一人は「この研修からドイツについて多くを学び、日本の教育についても見直すきっかけを得ました」と感想を述べていた。

(2) JASSO 留学生交流支援制度（協定受入）「韓国協定校からの海外小学校インターンシッププログラム（大阪）の受入」

平成 28 年 1 月 18 日（月）～2 月 12 日（金）

本学協定校のソウル教育大学（韓国）の学生が「海外小学校インターンシッププログラム」に参加した。JASSO の留学生交流支援制度（協定受入）に採択されたもので、7 人の学生に奨学金が授与され、1 月 18 日から 2 月 12 日まで研修を受けた。

研修は、日本の小学校で教育実習（10 日間）を行うため、多くは日本語で進められた。はじめに 2 週間、大学で、日本語、日本文化、異文化理解、日韓関係論や教育実習といった講義を 21 時限受講し、日本の小学校を理解した後、東大阪市立長瀬北小学校、同・弥刀小学校、同・長堂小学校で教育実習を行った。

研究授業は、韓国文化紹介を日本語で行った。時期的に旧正月だったので、韓国の正月にちなんだ品々を作るというもので、「福袋（お年玉袋）」「年賀状」「韓国正月衣装の塗り絵」と学年に合わせた授業を行った。児童に対する発問の仕方や授業時間の管理など、圧巻の学習指導案を準備して臨み、極めて良好な評価を得ることができた。また、週末を利用して山本能楽堂や関西各地（京都、奈良など）を訪れ、日本の伝統文化にも親しんだ。

研修中は、韓国に関心をもつ本学の学生たちがチューターとして常にサポートし、国際交流、異文化理解の実をあげることができた。これは、2 月 12 日に行われた、成果発表会

でも実習生も強調しており、非常に有意義なものとなった。

５．協定校などの来訪

UCL（University College London）Institute of Education のレズリー・グーレイ Lesley Gourlay 上級講師による特別講演会

本学が学術交流協定を結んでいるイギリスの UCL（University College London）Institute of Education からレズリー・グーレイ Lesley Gourlay 上級講師を迎え、10 月 28 日（水）に柏原キャンパスで国際センターと英語教育講座の共催による特別講演会を実施した。

講義は「Critical Perspectives on ‘Student Engagement’」をテーマに、昨今日本でも注目を集めている「アクティブ・ラーニング」および ICT 機器の導入による学習形態の変化に関して、批判的な考察を展開した。アクティブ・ラーニングに対して、従来のいわゆる「受動的」とされる学習形態は価値が低いのか、すなわち、「聴講」「執筆」そして「読書」は劣った学習方法なのか、という問題提起がなされた。そして、ひとりで行う学習に関しても、学生のレポート作成から提出にいたる過程を観察、調査した結果から、ICT 機器の発達によりそのプロセスに大きな変化がみられることが提示された。

今回の特別講義には学生、教職員を含め、15 人が参加し、真剣なまなざしで講義に聞き入っていた。グーレイ氏はペアワークやグループワークといった「アクティブ・ラーニング」において他の学生と「共同」で行う活動だけではなく、「ひとり」で講義を聞き、知識を増やすことや資料を読んだり、論文を書いたりする作業も重要であり、必ずしもそれらは「受動的な学習ではない」と説いた。

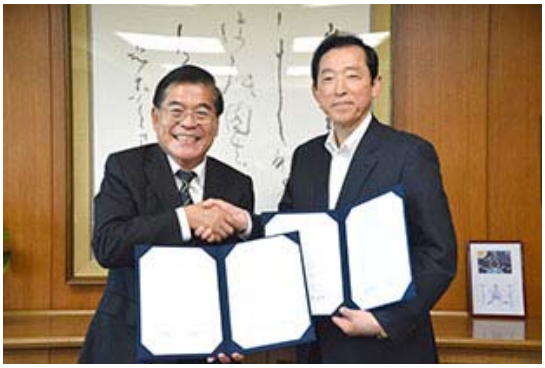
6. 学術交流協定

台湾・屏東大学と協定更新

本学の協定校である台湾の国立屏東大学の古源光学長、李欣怡教授、曾耀霆教授が 6 月 4 日（木）、柏原キャンパスを訪問した。同大学は、2013 年に本学との学術交流協定を締結した国立屏東教育大学が 2014 年 8 月に国立屏東商業学院と合併し、「国立屏東大学」と名称を変更した。一行の来学に併せて、協定更新のための調印式が執り行われた。

当日は、栗林澄夫学長と向井康比己副学長、およびこれまで国立屏東教育大学と学術交流を行ってきた美術教育分野の教員、国際センター教員らが、グローバル人材の養成や大学改革などについて終始穏やかな雰囲気で懇談し、歓迎昼食会の後、学内施設や授業、研究室を見学した。

栗林学長は「今回の協定更新を機に、人材交流を拡大していきたい」と抱負を語った。



平成 26 年度　国際センター行事

新入生オリエンテーション・歓迎会

平成 26 年 4 月 2 日（水）・4 日（金）

平成 26 年 9 月 30 日（火）・10 月 2 日（木）

平成 26 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを教員養成課程棟 1 階の会議室及び共通講義棟 A-202 で開催しました。これは新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年の新入生は右表のとおり 87 名でした。

区分	前期	後期
学 部 生	15	－
大学院生	13	－
教 研 生	7	－
日 研 生	－	17
研究留学生	1	－
特別聴講学生	5	21
研 究 生	3	5
計	44	43

伊藤国際センター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関すること等について説明を行いました。

夕方からは、指導教員や先輩留学生、日本人学生を交えた歓迎会が開催され、新入生の自己紹介、教員・先輩等の紹介を行いました。和やかな雰囲気のなか新入生の緊張もいくぶんかほぐれた様子でした。

春季日本文化研修－近江八幡・彦根方面－

平成 26 年 5 月 16 日（金）

平成 26 年 5 月 16 日（金）、恒例の春季日本文化研修が実施されました。暑いくらいの陽気の中、留学生 66 名、日本人学生 10 名、引率教職員 4 名が滋賀県近江八幡、彦根方面に向けて出発しました。本研修は、留学生と日本人学生とが交流を深めながら、日本の歴史や伝統文化を直に体験する機会として毎年開催されています。

今回の研修では、午前中には古き良き街並みが今に残る近江八幡の街を散策し、古くは近江商人の足として利用された八幡掘を船に乗って巡りました。

昼食をはさみ、午後からは国宝に指定される天主を持つ彦根城に向かいました。研修前に行われた事前講義で彦根城の歴史について学んだ学生たちは、長い歴史を感じさせる彦根城、天主内部の急な階段などに興味深く見入っていました。

また、学生たちは、彦根城から一望できる琵琶湖の眺めや、昨今のゆるキャラ人気の火付け役とも言われる「ひこにゃん」との出会いに一際大きな歓声をあげていました。愛らしいひこにゃんに後ろ髪を引かれながら彦根城をあとにし、思い思いのお土産を手にした学生たちは一路大阪への帰路につきました。

日本文化への見聞を広めながら、友人たちとの交流を深めた学生たちはとても充実した１日を過ごした様子でした。

「国際交流週間」を柏原キャンパスで実施

平成 26 年 5 月 26 日（月）～30 日（金）

本学留学生と日本人学生、柏原市民らとの交流を図り、異文化・国際理解に寄与することを目的として、5 月 26 日（月）から 30 日（金）を「国際交流週間」とし、複数の交流行事を実施しました。

まず、国際センターと大阪教育大学生活協同組合との共催により、第 2 食堂のバイキングメニューとして、留学生の出身地の料理をアレンジして販売しました。留学生がメニューやレシピを提案し、三杯鶏（台湾）、アドボ（フィリピン）、カオパット・サッパロット（タイ）、マカロニ&チーズ（アメリカ）が日替わりで提供されました。

5 月 28 日（水）には、サンクンガーデンを会場に、留学生によるパフォーマンスと留学生出身地の料理のテント販売を行い、多くの学生や市民が訪れました。サンクンガーデン中央では、フィリピン留学生によるギター演奏と歌、タイ留学生によるロイクラトンの踊りが披露され、盛大な拍手が起こりました。テント販売メニューはクトプラック（インドネシア）、ベトナム風揚げ春巻き、トッポッギ（韓国）で、用意した 150 食を 1 時間足らずで完売しました。料理を購入した人にはタコー（タイ）というデザートがプレゼントされました。このイベントには、生協学生委員会が会場運営、広報物作成などで協力しました。

また、同日、国際センター主催により、柏原市立旭ヶ丘小学校の 4 年生 78 人を大学に招き、留学生が出身地の文化、言葉、遊びなどを紹介しました。地図パズルと英語ミニレッ

スン（アメリカ）、伝統の遊び（韓国）など、6 つの国と地域に分かれて紹介し、子どもたちは積極的に発言していました。子どもたちからは「楽しかった」「外国の文化を知ることが出来て良かった」という声が多くきかれ、異文化に親しみをもつ機会となりました。この交流行事には柏原市が協力し、当日は柏原市教育委員会関係者や柏原市議会議員が見学しました。

留学生による無料語学教室（Language Table）

平成 26 年 6 月～7 月

平成 26 年 11 月～12 月

本学で学ぶ留学生と日本人学生の交流促進を目的として平成 19 年にスタートした「留学生による無料語学教室」は、今年で 8 年目を迎えました。第 15 回・16 回となる平成 26 年度は、留学生との交流を希望する受講生 64 名が語学教室に参加し、留学生の母語をとおした国際交流を楽しみました。普段授業等で言語を学ぶ受講生も、同年代の留学生ならではの現地情報や若者文化の実情に聞き入っている様子でした。どの教室も和やかな雰囲気で進められ、留学生・受講生ともに言語学習を越えた文化交流という貴重な時間を過ごせたようです。 本プログラムは平成 27 年度も継続して開講を予定しています。

留学生のための七夕飾り体験を実施

平成 26 年 7 月 2 日（水）

今年度も、シニア CITY カレッジと国際センター共催「七夕飾り体験」が 7 月 2 日（水）に開催されました。 この催しは、カレッジ生のみなさんと大阪教育大学で学ぶ留学生との「日本の伝統行事を通じた国際交流」を目的とするものです。

今回は「七夕」をテーマとして、カレッジ生代表による七夕の由来の説明のあと、カレッジ生・留学生が一緒に短冊作りや飾りつけを行い、七夕の歌を合唱し、楽しくにぎやかな時間を過ごしました。留学生は「七夕飾りは日本に来て初めてですが、楽しかったです。」と話していました。

柏原市民に講演　－異文化の暮らしを学習しようー

平成 26 年 7 月 16 日（水）

平成 26 年 11 月 5 日（水）

柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座、「異文化の暮らしを学習しよう」では、本学の留学生が講師を担当しています。平成 26 年度は 7 月 16 日（水）と 11 月 5 日（水）の 2 回開催され、7 月にはブルガリアの古都ヴェリコ・タルノヴォ出身の日本語日本文化研修留学生チャラコヴァ・マリア（通称マリア）さんが母国について紹介しました。

マリアさんの話は、ヴァルナで発見された世界最古の黄金の宝物をはじめとする貴重な文化遺産、歴史、自然、民俗芸能、伝統工芸、民族衣装、バラ祭りなど、多岐にわたりました。「変拍子」が特徴的な民謡や伝統舞踊「ホロ」、美しい色の陶芸やブルガリア織、精巧な木彫りのほか、春に悪霊を追い払うために行われる伝統的な行事「クケリ」、毎年春を迎える時に健康や幸福を願って親しい人と交換する紅白のお守りのような飾り「マルテニツァ」など、ブルガリアで長年受け継がれてきた伝統の豊かさに会場は魅了されました。

最後には、有志が伝統舞踊「ホロ」を体験しました。単純に見えても「変拍子」で複雑な動きになっているため、実際に音楽に合わせるのは至難の業でしたが、「難しいけれども楽しかった」との感想が寄せられました。講演終了後も、マリアさんが持参した写真、陶芸、バラ製品などに見入っている方が多く見られました。

また、11 月 5 日（水）には、シンガポール出身の教員研修留学生リー・シャンシャン（通称シャンシャン）さんが母国について話しました。

東京 23 区にほぼ匹敵する広さの国土に約 540 万人が暮らすシンガポールは、中国系、マレー系、インド系など多くの民族で構成される多民族国家です。シャンシャンさんは、学校で毎年行われている Racial Harmony Day（民族融和の日）という行事を取り上げ、様々なルーツを持つ人々がお互いを尊重し、理解し合えるよう、子どもたちが体験的に学ぶ様子を紹介しました。

また、限られた国土を有効に活用するために住宅開発庁によって公共住宅が建設され、持ち家率が 90%を超えているという住宅事情のほか、主要産業、食生活、言語や宗教など、写真を交えながら詳しく説明しました。

参加者からは、「名前しか知らなかったシンガポールが身近に感じられた」「多民族社会なのに自治がしっかりしていると感じた」「何年か前に行ったが、また行きたいと思う」などの感想が寄せられました。地域に根ざした国際交流の取り組みとして、今後も継続したいと考えています。

留学フェアに参加

台湾　平成 26 年 7 月 19 日（土）・20 日（日）

タイ　平成 26 年 8 月 29 日（金）・31 日（日）

韓国　平成 26 年 9 月 13 日（土）・14 日（日）

インドネシア　平成 26 年 9 月 21 日（日）

今年度も 7 月～9 月にかけて、日本学生支援機構主催による「日本留学フェア」に参加しました。本フェアは日本への留学を希望する高校生・大学生等を対象として世界各国主要都市で毎年開催されており、今年度は台湾、タイ、韓国の 3 カ国に参加し、日本留学を希望する多くの学生に大阪教育大学をＰＲしました。また、海外への留学生数が年々増加しているインドネシアでは若者に大阪留学を PR する博覧会（主催 : 大阪府国際化戦略実行委員会）が開催され、たくさんの来場者が本学ブースを訪れました。

≪本学ブース訪問者数≫

台湾（高雄・台北）	7 月 19 日・20 日開催 … 34 名
タイ（チェンマイ・バンコク）	8 月 29 日・31 日開催 … 65 名
韓国（釜山・ソウル）	9 月 13 日・14 日開催 … 65 名
インドネシア（バンドン）	9 月 21 日開催 … 90 名

4 カ国 7 会場を通して計 254 名のフェア参加者が本学ブースを訪れ、熱心な眼差しで担当教員の説明に耳を傾けていました。

オープンキャンパスを開催

平成 26 年 7 月 26 日（土）・27 日（日）

今年も開催された「オープンキャンパス」で留学生向けの説明会と日本人学生向けの留学相談会を開催しました。近畿圏の日本語学校等から留学生 20 人、留学等に関心のある日本人受験者 59 人の参加がありました。本学へ進学を希望する留学生には、在籍留学生がチューターとなって、説明会の通訳補助や大学施設の案内を行い、進学相談にも応えていました。

また、留学生向けの全体説明会では、本学の特色や施設、行事、留学生の支援制度についての説明が行われた後、私費外国人留学生試験等に関する受験資格や試験科目、注意事項についての説明が行われました。引き続き、先輩留学生の体験談として、26 日には張楚さん（教養学科文化研究専攻日本・アジア言語文化コース）、27 日には邱艶淋さん（大学院教育学研究科総合基礎科学専攻数理情報（情報分野）コース）が、それぞれ本学の良さや試験対策について語ってくれました。

並行して開催された交換留学や語学研修に関心のある日本人受験者向けの相談会では、熱心な受験者の質問に対して、国際センタースタッフが丁寧に応えていました。

平成 26 年度留学生修了証書授与式を挙行

平成 26 年 8 月 7 日（木）

平成 27 年 2 月 17 日（火）

平成 26 年度留学生修了証書授与式が前期は 8 月 7 日（木）、後期は 2 月 17 日（火）に事務局棟 4 階大会議室及び大学会館 1 階第一食堂で執り行われ、日本語・日本文化研修留学生（15 名）、特別聴講学生（27 名）、教員研修留学生（8 名）に修了証書が授与されました。栗林学長から一人ずつ名前が呼ばれると、修了生は緊張した面持ちで証書を受け取りました。栗林学長、伊藤国際センター長が祝辞を述べた後、オルセン・ヨナスさん（デンマーク）とニ･ヤジンさん（中国）が前期修了留学生の代表として、ジョシ・ルシャリ・ナラヤンさん（インド）とブルン・ダニエル・リーさん（オーストラリア）が後期修了留学生の代表として謝辞を述べました。

その後、大学会館 1 階第一食堂に会場を移し、地域の国際交流団体および教員とともに交流会を行いました。交流会では、国際センターの教員から記念品と花束が一人一人に手渡された後、修了生一人一人からお別れのスピーチが述べられ、本学の思い出に涙する人もいました。そして、修了生たちの前途を祝して、参列者全員で作ったアーチの花道で送り出しました。

夏季日本文化研修　－浮世絵体験－

平成 26 年 8 月 6 日（水）

平成 26 年夏の日本文化研修では道頓堀界隈に立つ上方浮世絵館を訪れました。18 名の学生が参加し、４階建ての館内の浮世絵を１階から順に鑑賞し、最上階まで行くと日本間に通されました。そこで館長さんから上方浮世絵の歴史について説明を受け、大阪の浮世絵は道頓堀を中心とする歌舞伎芝居に出演する役者たちを描いた役者絵が多いことなどを学びました。留学生は昔の道頓堀の写真や歌舞伎役者の浮世絵をしげしげと眺め、浮世絵制作体験の時間では、館長さんや職員さんに教わりながら、初めて版に絵の具を付け、慎重に馬連を押し当て、三色刷りの作業に勤しんでいました。同じ版を使っても、色の濃淡や馬連の押し方に違いがあり、それぞれ個性的な作品ができあがり、大満足の様子でした。

インドネシア体育協会訪問団が来学

平成 26 年 10 月 23 日（木）

インドネシア保健体育協会に所属するインドネシア教育大学の Adang Suherman 教授らが本学柏原キャンパスを訪問しました。

当日は、栗林学長を表敬訪問した後、本学保健体育講座の太田順康教授と長谷川ユリ国際センター教授が、本学の保健体育教育の概要や留学生受入体制について説明し、訪問団と活発な意見交換を行いました。

秋季日本文化研修－淡路・鳴門方面－

平成 26 年 10 月 25 日（土）

平成 26 年 10 月 25 日（土）、恒例の秋季日本文化研修が実施されました。留学生と日本人学生との交流を促進し、日本の地理・歴史や風土、文化を直に体験する機会として開催されている本研修には、毎年多くの学生が参加しています。今回の研修は、留学生 54 名、日本人学生 7 名、引率教職員 3 名が参加し、朝から淡路・鳴門方面に向けて出発しました。道中、世界最長の吊橋である明石海峡大橋を通った際にはその迫力に学生たちから歓声があがりました。

今回の研修は、徳島・鳴門の「渦の道」を見学後、昼食をはさみ遊覧船で渦潮を見学。その後、淡路島に移動してみかん狩りという盛りだくさんの内容です。最初に訪れた「渦の道」は鳴門海峡に架かる大鳴門橋の橋桁内(車道の下)に造られた海上遊歩道です。通路にところどころ設置されたガラス張りの床から見える渦潮は見ごたえ満点で、学生は皆息を呑んで見入っていました。

昼食をはさみ、午後からは遊覧船に乗って、渦潮を見学しました。事前講義で渦潮の仕組みや鳴門地方特有の地理などについて学んでいた学生たちは、実際に目の前で現れては消える渦潮を興奮した様子で眺めていました。

その後、淡路島へと移動し、みかん農園でもぎたてのみかんに舌鼓を打ちました。まさにこの時期から旬を迎えるみかんはどれもとても甘く、10 個以上をぺろりと平らげた学生もいました。朝から盛りだくさんの行程を終えた学生たちは心地よい疲れと思い思いのお土産を手に、大阪への帰路につきました。友人との交流を深めながら、日本の文化や風土を直に体験した学生たちはとても充実した 1 日を送った様子でした。

第 9 回東アジア教員養成国際シンポジウムに参加

平成 24 年 11 月 4 日（火）～5 日（水）

11 月に韓国・大田のホテルリビエラで第 9 回東アジア教員養成国際シンポジウムが開催され、本学からは栗林学長、向井副学長、教職教育研究センター冨田先生、実践学校教育講座大脇先生、丸井財務課長が参加しました。第 9 回を迎えた本シンポジウムでは「デジタル時代のスマートエデュケーションと教員養成」を主題とし、韓国・中国・日本・台湾の４つの国・地域から大学関係者が集まり、母国の教員養成の現状や課題について議論し、活発な意見交換が行われました。

柏原キャンパスの学生宿舎・留学生宿舎で防災訓練を実施

平成 26 年 11 月 19 日（水）

大規模地震を想定した防災訓練を，11 月 19 日（水）に柏原キャンパスの学生宿舎と留学生宿舎で合同実施しました。

授業が少なく入居者が多くいる水曜日の午後に，震度 6 強の地震が起こり，間もなく各宿舎の補食室から火災が発生したという想定です。入居する学生 122 人のほか，学生サービス課，学術連携課，学生支援実施委員会，国際センター，障がい学生修学支援ルーム等の教職員 17 人が参加しました。参加者は，初期消火やけが人の搬送，通報，避難を分担して行い，続いて代表者による普通救命，避難ばしご，水消火器訓練を行いました。

指導にあたった学校危機メンタルサポートセンターの豊沢純子准教授ら関係教員から，「平素からの防災意識」や「周囲の人との交流は様々な災害に対する備えになる」などの講話があり，参加した学生からは「非常時に何をすればよいか分かった」等の感想が聞かれました。

学生宿舎と留学生宿舎は隣接しており，本学では今後も可能な限り合同で訓練を重ねていく計画です。

留学生に奨学金を授与

平成 26 年 12 月 3 日（水）

大阪教育大学留学生後援会による平成 26 年度奨学金等贈呈式を 12 月 3 日（水）に行い、私費外国人留学生に奨学金を授与しました。

留学生後援会は、留学生への経済的支援、地域との国際交流の促進を目的として、地域の支援団体及び本学教職員等により構成された組織で、平成 15 年度から毎年、留学生に対し奨学金を授与しています。今年度は、寄付団体名を冠した奨学金 4 人、留学生後援会 7 人、大阪柏原ロータリークラブ教育支援金 3 人の計 14 人に奨学金を授与しました。

留学生代表として挨拶した大学院 1 回生のキュウエンリンさん（中国）は「現実の留学生活は想像以上に厳しく、学業とアルバイトの両立に苦労し、疲れに耐えながら留学生活を送ってきました。留学生後援会奨学金によりご支援くださった皆様に心底から感謝しております。このお金を大事に使わせて頂き、学業に専念することはもちろん、様々な活動に積極的に参加していきたいと思います。（要約）」とお礼の言葉を述べました。

奨学金等提供団体

- 国際ソロプチミスト大阪－柏原
- 柏原ライオンズクラブ
- 大阪柏原ロータリークラブ
- 大阪教育大学生協
- 大阪教育大学留学生後援会

日本文化を楽しむ会着物体験　グローバル香芝主催

平成 27 年 2 月 21 日（土）

グローバル香芝様主催による日本文化体験が今年度も開催されました。先輩留学生から本行事について既に聞いている留学生もおり、期待に胸躍らせる女子学生 15 名・男子学生 5 名が、寒空のもと「日本文化を楽しむ会」に出かけました。

まず振袖と羽織袴に身を包み、後ろ姿を鏡に映して豪華な帯結びに大はしゃぎでした。その後着物姿のまま茶道体験にご案内いただき、伝統的な和菓子とお抹茶を堪能した後は、友人たちと賑やかに写真を撮りあいました。

午後からは、平成 26 年度で設立 20 周年を迎えるグローバル香芝様の記念式典の催し、「クイズで世界新発見」と題された交流会に出席し、会場に集まった会員・支援者の皆さんに留学生が母国をクイズ形式で紹介し、会場は大いに盛り上がりました。

留学生日本文化体験研修　－愛知・明治村－

平成 27 年 2 月 12 日（木）～13 日（金）

平成 27 年 2 月 12 日、留学生 49 名と引率教員 3 名を乗せた 2 台のバスが、愛知県犬山市に向かいました。1 泊 2 日の日本文化体験研修の初日は博物館明治村の見学でスタート。明治村は明治時代に西洋の影響を受けて建築された貴重な文化財が移築された広大な野外の博物館です。留学生たちは村内マップを片手に思い思いのルートで明治の日本を体験していました。そして、宿泊した長良川温泉では、和風の旅館と温泉を楽しみ、2 日目は名古屋城とトヨタ産業技術記念館を訪れました。修復中の名古屋城では文化財の保護について学び、一方トヨタ記念館ではトヨタの社史を通じて近代日本の発展を知ることができました。名古屋城では雪に降られましたが、2 日間で今日に至る日本の歴史について多くを学んだようです。

冬季日本文化研修　－大相撲－

平成 27 年 3 月 13 日（金）

国際センターの春休みの恒例行事、大相撲春場所観戦。3 月 13 日に 26 名の留学生が行ってきました。当日は出発前に国際センターの長谷川ユリ教授から相撲に関する事前講義を受け、大阪府立体育会館へ向かいました。

会場の外には色とりどりののぼりが飾られ、入り口付近では力士の到着を待つ相撲ファンが集まっていました。学生たちは本場所ならではの熱気を感じながら場内に入り、観戦しました。土俵からは離れた客席でしたが、力士たちがぶつかり合う音や行司のかけ声などがよく聞こえ、力士の迫力ある動きに驚いた様子でした。取組ごとに歓声を上げて声援を送り、支度部屋に出入りする力士を見に行くなど、皆思い思いに楽しんでいました。

平成 27 年度　国際センター行事

新入生オリエンテーション・歓迎会

平成 27 年 4 月 2 日（木）・3 日（金）

平成 27 年 9 月 30 日（水）・10 月 2 日（金）

平成 27 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを開催しました。これは新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年の新入生は右表のとおり 111 名でした。

高橋国際センター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関すること等について説明を行いました。

夕方からは、指導教員や先輩留学生、日本人学生を交えた歓迎会が開催され、新入生の自己紹介、教員・先輩等の紹介を行いました。和やかな雰囲気のなか新入生の緊張もいくぶんかほぐれた様子でした。

区分	前期	後期
学 部 生	15	－
大学院生	17	－
教 研 生	6	2
日 研 生	－	16
研究留学生	－	1
特別聴講学生	13	26
研 究 生	5	5
忠南大学受入プログラム	5	－
計	61	50

春季日本文化研修－京都方面－

平成 27 年 5 月 15 日（金）

平成 27 年 5 月 15 日（金）、恒例の春季日本文化研修が実施されました。暑いくらいの陽気の中、留学生 64 名、日本人学生 7 名、引率教職員 4 名が京都方面に向けて出発しました。本研修は、留学生と日本人学生とが交流を深めながら、日本の歴史や伝統文化を直に体験する機会として毎年開催されています。

今回の研修では、午前中に西陣織会館を訪れ、日本の伝統工芸である西陣織の艶やかな着物ショーを観覧し、その美しさを堪能しました。

昼食をはさみ、午後からは建仁寺を訪れ、座禅体験を行いました。日研生のカオ・ニロットさんは「自分が飛んでいるような気持ちで何も考えずにいられるのは初めて」と感想を述べていました。

また、その後月桂冠大倉記念館へ行き、日本酒の製造過程を見学した後、伏見の町を散策し、一路大阪への帰路につきました。

日本文化への見聞を広めながら、友人たちとの交流を深めた学生たちはとても充実した１日を過ごした様子でした。

「国際交流週間」を柏原キャンパスで実施

平成 27 年 6 月 1 日（月）～5 日（金）

留学生と日本人学生、教職員、地域住民の方との交流を図り、異文化・国際理解に寄与することを目的として、国際センターと大阪教育大学生活協同組合との共催による「国際交流週間」を、6 月 1 日（月）から 5 日（金）までの期間に実施しました。

6 月 1 日（月）、2 日（火）、4 日（木）5 日（金）には、第 2 食堂のバイキングメニューとして、留学生の出身地の料理をアレンジして販売しました。留学生はメニューやレシピ提案を行い、マカロニ＆チーズ（アメリカ）、お茶卵（台湾）、パプリカーシュ・クルンプリ（ハンガリー）、チャー・クニャイ・サッチ・モワン（カンボジア）が日替わりで提供されました。レシピ提案を行った留学生たちは口々に「おいしい」「国の味と同じ」と笑顔を見せていました。

6 月 3 日（水）には、サンクンガーデンを会場に、留学生によるパフォーマンスと留学生出身地メニューのテント販売を行いました。

テントでは、トムカーガイ（タイ）、ルンダン（インドネシア）、ラミントン（オーストラリア）が販売されました。またテント販売の横では、中国とベトナムからの留学生が

母国の伝統衣装を着て司会を務め、ハンガリーからの留学生がハンガリーの踊り（キティ＆ジョルト）を、チーム絆（カンボジア、スリランカ、ミャンマー、ブラジル、インドネシア、タイ、ハンガリーの７か国の留学生によるチーム）が各国の音楽にあわせて踊る、『多国籍踊り』をそれぞれ披露しました。会場にはたくさんの人が集い、時折クイズを交えながらのにぎやかな司会や鮮やかな民族衣装を着てのパフォーマンスに盛大な拍手が起こりました。

イベントの準備段階から会場運営、広報物作成など、生協学生委員会が精力的に活動し、留学生と力をあわせてイベントを盛り上げました。

留学生による無料語学教室（Language Table）

平成 27 年 6 月～7 月

平成 27 年 11 月～12 月

本学で学ぶ留学生と日本人学生の交流促進を目的として平成 19 年にスタートした「留学生による無料語学教室」は、今年で 9 年目を迎えました。第 17 回・18 回となる平成 27 年度は、留学生との交流を希望する受講生 23 名が語学教室に参加し、留学生の母語をとおした国際交流を楽しみました。普段授業等で言語を学ぶ受講生も、同年代の留学生ならでは

の現地情報や若者文化の実情に聞き入っている様子でした。どの教室も和やかな雰囲気で進められ、留学生・受講生ともに言語学習を越えた文化交流という貴重な時間を過ごせたようです。

留学生のための七夕飾り体験を実施

平成 27 年 7 月 1 日（水）

本学留学生を対象とした七夕の笹飾り体験を、シニア自然大学校との共催により、 7 月 1 日（水）に開催しました。

前日、刈り取ったばかりという瑞々しい笹の緑が薫る中で、色とりどりの飾りを作り、それぞれの想いをのせた短冊とともに笹を彩りながら、シニア自然大学校の会員と交流を深めました。また今回は、八尾市の姉妹都市であるアメリカのベルビュー市からホームステイに来た高校生も特別に参加しました。

短冊には、七夕らしく恋人のことを案ずるものや、故国の家族の安全祈願、さらには「日本語能力検定合格」「就職できますように」「お金持ちになりますように」といったものまで、それぞれの個性があふれた願いごとを記入していました。留学生たちは、丁寧な指導を受けながら、友人たちと賑やかに笹飾りを作り、日本の文化を満喫しました。

終了後は、恒例の記念撮影の後、栗林学長を表敬訪問し、出来上がったばかりの七夕飾りを贈りました。

柏原市民に講演　－異文化の暮らしを学習しよう－

平成 27 年 7 月 1 日（水）

柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座「異文化の暮らしを学習しよう」（主催：柏原市人権推進課）に、7 月 1 日（水）、本学の留学生フィゼレ・キティさんが講師として招かれ、出身国のハンガリーについて紹介しました。キティさんは、ハンガ

リーのエトヴェシュ・ロラーンド大学（別名ブダペスト大学）で日本語学を 4 年間学び、日本語・日本文化研修留学生として本学で 1 年間、日本語や日本文化を学んでいます。

キティさんは、名物の刺繍やパプリカ、温泉、自然、世界遺産、行事やお祭り、歴史など、ハンガリーの様々な魅力を語りました。ソフトコンタクトレンズやマッチ、ルービックキューブなど、日本人の日常生活にもなじみ深いものがハンガリーで発明されたことが紹介されると、参加者は感心した様子で聞き入っていました。また、時折ハンガリーにまつわるクイズを出題し、正解者にはハンガリーのチョコレートやバッジをプレゼントしました。

講演の最後には、キティさんの婚約者で、大阪大学で研究員をしているベネデク・ジョルトさんとともに、ハンガリー刺繍がちりばめられた民族衣装をまとって民族舞踊を披露し、会場を魅了しました。

留学フェアに参加

平成 27 年 7 月～平成 27 年 11 月

7 月～11 月にかけて、日本学生支援機構主催による「日本留学フェア」に参加しました。また今年度は JICA 日本センター主催のキルギスでの留学フェアにも初めて参加しました。「日本留学フェア」は日本への留学を希望する高校生・大学生等を対象として世界各国主要都市で毎年開催されており、日本留学を希望する多くの学生に大阪教育大学をＰＲしました。初参加となったキルギスでは本学で勉強したことがある元留学生も応援にかけつけ、「寮はありますか」「奨学金はありますか」「どのようなこと勉強できますか」等、熱心に質問する学生に先輩としてアドバイスをしていました。

≪本学ブース訪問者数≫

台湾（高雄・台北）	7 月 18 日・19 日開催 … 44 名
韓国（釜山・ソウル）	9 月 12 日・13 日開催 … 90 名
ベトナム（ハノイ・ホーチミン）	10 月 31 日・11 月 1 日開催 … 87 名

キルギス（ビシュケク）　　11 月 3 日・4 日開催 … 200 名

4 カ国 7 会場を通して計 254 名のフェア参加者が本学ブースを訪れ、熱心な眼差しで担当教員の説明に耳を傾けていました。

オープンキャンパスを開催

平成 27 年 7 月 25 日（土）・26 日（日）

今年も開催された「オープンキャンパス」で留学生向けの説明会と日本人学生向けの留学相談会を開催しました。近畿圏の日本語学校等から留学生 18 人、留学等に関心のある日本人受験者 47 人の参加がありました。本学へ進学を希望する留学生には、在籍留学生がチューターとなって、説明会の通訳補助や大学施設の案内を行い、進学相談にも応えていました。また海外の協定校へ交換留学経験のある日本人学生が、留学を志す高校生から質問をうけ、自らの留学体験談語りや本学の留学制度などについて説明しました。

また、留学生向けの全体説明会では、本学の特色や施設、行事、留学生の支援制度についての説明が行われた後、私費外国人留学生試験等に関する受験資格や試験科目、注意事項についての説明が行われました。引き続き、先輩留学生の体験談として、25 日には李文昊さん（大学院教育学研究科国際文化研究専攻日本・アジア言語文化研究コース）、26 日譚鑫さん（大学院教育学研究科総合基礎科学専攻数理情報（情報分野）コース）が、それぞれ本学の良さや試験対策について語ってくれました。

並行して開催された交換留学や語学研修に関心のある日本人受験者向けの相談会では、25 日にはオーボ・アカデミー大学バーサ校（フィンランド）に留学していた今市佳奈江さん（教養学科文化研究専攻社会文化コース）、26 日は梨花女子大学（韓国）に留学していた豊川真礼さん（教員養成課程教育科学専攻教育学コース）が留学までの道のりや実際の留学生活について語りました。受験生からは留学に行くまでにどのような準備を行ったか？など質問が相次ぎました。

平成 27 年度前期留学生修了証書授与式を挙行

平成 27 年 8 月 11 日（火）

平成 27 年度前期留学生修了証書授与式が 8 月 11 日（火）、柏原キャンパス大学会館 1 階「Dinning Terra」で執り行われ、日本語・日本文化研修留学生 17 人、特別聴講学生 26 人及び、特別聴講学生：忠南大学グローバル人材育成プログラム 5 人に修了 証書が授与されました。

栗林澄夫学長から名前が呼ばれる と、修了生代表者はしっかりとした動作で副学長の前に進み、証書を受け取りました。栗林学長が祝辞を述べた後、日本語・日本文化研修留学生の FANTE MANFRIN MARIANA さん（ブラジル）が修了生を代表して、「留学生の皆と一緒に世界中の文化を学べ、日本人学生と授業を受けることで日本人の考え方や物事の見 方なども少しわかることができました。本当に留学しないと分からないことをたくさん体験でき、とても感謝しています。本当に、本当に、大変お世話になりま した」とあいさつしました。

その後、地域の国際交流団体、教員及びチューターの日本人学生等とともに交流会を行いました。交流会では、本学中西理事からの祝辞、来賓挨拶としてシニア自然大学校・小松理事から祝辞の後、修了生一人一人が紹介され、大学から記念品が贈られました。

修了生たちは、本学での留学生活を終え、次の一歩を踏み出すように会場を後にしました。

柏原市民に講演　－異文化の暮らしを学習しようー

平成 27 年 11 月 4 日（水）

11 月 4 日（水）、柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座「異文化の暮らしを学習しよう」において、本学の留学生ファム・ティートウンさんが講師として招かれ、出身国のベトナムについて紹介しました。ファムさんは、教養学科健康生活科学科の 2 回生です。また、同じベトナムからの留学生、教養学科情報科学 1 回生のレ・フンニンさんも応援に駆けつけ、多くの聴講者の前、日本語で発表を行いました。

ファムさんの話は、ベトナムは多民族国家で、民族が 54 もあるなど、興味深いものでした。ベトナムは南北に長く、それぞれの地方によって、気候、文化も異なるということを上手な日本語で紹介しました。

ベトナムの紹介では、フォーなどの日本でも有名になってきた食べ物やアオザイのような民族衣装まで、動画を使って分かりやすく説明し、聴講者にもベトナムが近く感じられたようでした。

講演の最後には、ベトナムの質問が出ましたが、聴講者のベトナム青年との心温まる交流も紹介され、会場の拍手を誘っていました。

柏原キャンパスの学生宿舎・留学生宿舎で防災訓練を実施

平成 27 年 11 月 25 日（水）

地震・火事・台風がテーマの防災研修を、11 月 25 日（水）に柏原キャンパスの学生宿舎と留学生宿舎入居者を対象に、柏原キャンパスで実施しました。入居者 137 人のほか、学生サービス課、学術連携課、学生支援実施委員会、国際センター等の教職員 10 人が参加しました。

最初に柏原羽曳野藤井寺消防組合（以下「柏羽藤消防組合」）の隊員が地震・火事を中

心とした事例を紹介し、学生らが集団で暮らす学生宿舎での備えについて講義しました。

次のグループワークでは、事前に入居者が準備した学生宿舎の危険個所の写真をもとに、課題を検討しました。3 宿舎の入居者がグループを組み、協力しながら 課題を 1 枚の地図にまとめ、代表者が発表しました。「日頃から整理整頓に努める」「宿舎周辺に違法駐車しない」「靴箱などの大型の棚は固定する」等の意見 が出され、指導にあたった学校危機メンタルサポートセンターの豊沢純子准教授は、「日頃から防災意識を持ち、周囲の人と注意し合う環境づくりに努めること が、様々な災害に対する備えになります」とアドバイスしました。

3 つ目のプログラムでは教職教育研究センターの池谷特任准教授が、阪神大震災 での自らや家族の体験を語り、「震災の経験から、お互いに知り合うことこそが、一番の防災ではないかと考えるようになりました。物が密集して歩きにくい、 出口が見えにくい部屋は災害時には命とりです。整理整頓が生命線になることを意識して、今日から始めてください」と総括しました。

参加した学生からは「グループワークでは、いろんな意見が出されて参考になった」「大きな災害を経験したことがなかったので、目を向けるきっかけになった」「この学びを安全で快適な宿舎環境に活かしていきたい」などの声が寄せられました。

学生宿舎と留学生宿舎は隣接しており、本学では今後も可能な限り連携し、防災訓練や研修を重ねていく計画です。

秋季日本文化研修－和歌山方面－

平成 27 年 11 月 28 日（土）

毎年恒例の秋季日本文化研修を、11 月 28 日（土）に実施しました。留学生と日本人学生との交流を促進し、日本の地理や歴史、風土、文化を直に体験する機 会として開催されている本研修には、毎年多くの学生が参加しており、今回の研修では、留学生・日本人学生 72 人と引率教職員 5 人が和歌山県の名所を見学し ました。

最初に訪れた「紀州漆器伝統産業会館 うるわし館」では、会津漆器、越前漆器、山中漆器とともに日本の四大漆器のひとつに数えられる紀州漆器を見学し、伝統工芸である蒔絵を体験しました。下絵 の描かれたお盆の中から好みのものを選び、人工漆を塗り、そこに金粉を散らして蒔絵を完成させます。同じ下絵のお盆を選んでも、人工漆の塗り方や、金粉の 色の付け方が人により違うので、学生たちはお互いに自分の作品を見せ合いながら作業し、世界に一つだけの自分のお盆の完成をとても喜んでいました。

昼食には、観光漁港として有名な黒潮市場を訪れ、日本の海の幸に舌鼓を打ちました。

最後に、西国三十三所第 2 番札所の紀三井寺（紀三井山金剛宝寺護国院）を見学しました。21 世紀になって建立された、日本最大の寄せ木造の十一面観音が有 名ですが、山頂の古びた弁天堂も知る人ぞ知る紀三井寺の奥の院です。学生たちは食後の運動とばかりに本堂まで駆け上がり、ふもとの町から遠くに広がる海ま でが一望できる絶景を堪能していました。また、紀三井寺の縁結びの坂は、みかんで有名な紀伊国屋文左衛門の結縁の石段です。それにあやかり、学生たちは有 田みかんを続々と購入し、バスの中に柑橘系の香りが充満しました。朝から盛りだくさんの行程を終えた学生たちは心地よい疲れと思い思いのお土産を手に、大 阪への帰路につきました。

友人との交流を深めながら、日本の文化や風土を直に体験した学生たちはとても充実した顔つきで 1 日を送っていました。

同研修に参加した留学生たちは、「蒔絵体験がとても面白く、自分で作ることで日本の

伝統文化への理解も深まった」「案内してくれた日本人ボランティアが街 並みの歴史やその発展について解説してくれたおかげで、より深く歴史を知ることができた」「お昼ご飯は美味しいし、紀三井寺もとても美しく、素晴らしい旅 だった」と口々に旅の思い出を語っていました。

留学生のための門松づくり体験

平成 27 年 12 月 16 日（水）

12 月 16 日（水）、シニア自然大学校の皆様主催により、今年度も恒例の「門松づくり」体験を開催していただきました。日本人でも門松を作ることが少なくなり、留学生にとっては貴重な体験です。

参加した留学生達のために立派な孟宗竹や南天、千両、万両、そしてメインとなる松などの材料が用意されました。日本の鋸を使うのは初めてなのか、留学生も最初は戸惑っていましたが、慣れると上手に孟宗竹を切って行きました。シニア自然大学校の皆様にやさしく手ほどきいただきながら、立派な門松を完成させました。また、飾りとして折り紙も習い、日本の文化に触れることのできた一日でした。この日参加した留学生は 30 名、シニア自然大学校の皆様は 61 名も見えられるなど、門松づくりは七夕の笹飾りとあわせて留学生に大人気の体験プログラムです。

普段はペンしか使わない留学生達ですが、こうしてペンを鋸に持ち替え、束の間のひとときを地域の皆様と交流し、自然に触れ合う素晴らしい機会を満喫していました。

平成 26 年度国際センター運営委員会名簿

区　分	氏　名	所　属	備　考
国際センター長	伊　藤　敏　雄	社会科教育講座（兼任）	委員長
国際センター専任教員	長谷川　ユ　リ	国際センター	
	城　地　　茂	国際センター	
	赤　木　登　代	国際センター	
	中　山　あおい	国際センター	(宿舎運営)
	若　生　正　和	国際センター	(宿舎運営)
国際センター兼任教員 ＊	加　藤　可奈衛	美術教育講座	(宿舎運営)
	小　林　和　美	社会科教育講座	
	水　野　治　久	学校教育講座	
	石　橋　紀　俊	日本・アジア言語文化講座	(宿舎運営)
	井　上　直　子	欧米言語文化講座	
	藤　田　　修	情報科学講座	
	松　本　マスミ	欧米言語文化講座	
	辻　本　英　和	社会文化講座	
	中　田　博　保	自然研究講座	
学 長 指 名 委 員 ＊	安　部　文　司	欧米言語文化講座	
	上古殿　宜　博	学術連携課長事務取扱	～9 月 30 日
	森　下　直　也	学術連携課長	10 月 1 日～

＊任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 27 年度国際センター運営委員会名簿

区　分	氏　名	所　属	備　考
国際センター長	高　橋　　登	学校教育講座（兼任）	委員長
国際センター専任教員	長谷川　ユ　リ	国際センター	
	城　地　　茂	国際センター	(宿舎運営)
	赤　木　登　代	国際センター	
	中　山　あおい	国際センター	(宿舎運営)
国際センター兼任教員 ＊	加　藤　可奈衛	美術教育講座	(宿舎運営)
	小　林　和　美	社会科教育講座	
	水　野　治　久	学校教育講座	
	石　橋　紀　俊	日本・アジア言語文化講座	(宿舎運営)
	井　上　直　子	欧米言語文化講座	
	藤　田　　修	情報科学講座	

国際センター兼任教員 ＊	松　本　マスミ	欧米言語文化講座	
	辻　本　英　和	社会文化講座	
	中　田　博　保	自然研究講座	
学 長 指 名 委 員 ＊	橋　本　健　一	英語教育講座	
	森　下　直　也	学術連携課長	

＊任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 26 年度留学生宿舎運営会議名簿

氏　名	所　属	備　考
中　山　あおい	国際センター（国際教育）	委員長
若　生　正　和	国際センター（国際教育）	
加　藤　可奈衛	美術教育講座	
石　橋　紀　俊	日本・アジア言語文化講座	

任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 27 年度留学生宿舎運営会議名簿

氏　名	所　属	備　考
中　山　あおい	国際センター（国際教育）	委員長
城　地　　茂	国際センター（国際事業）	
加　藤　可奈衛	美術教育講座	
石　橋　紀　俊	日本・アジア言語文化講座	

任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 26 年度国際交流委員会委員名簿

	氏　　名	備　　考
副学長	向　井　康比己	委員長
国際センター長	伊　藤　敏　雄	副委員長
国際センター　専任教員	長谷川　ユ　リ	国際教育部門
国際センター　専任教員	城　地　　茂	国際事業部門
国際センター　専任教員	赤　木　登　代	国際事業部門
国際センター　専任教員	中　山　あおい	国際教育部門

国際センター　専任教員	若　生　正　和	国際教育部門
国際センター兼任教員	松　本　マスミ	
国際センター兼任教員	水　野　治　久	
教員養成課程＊	橋　本　健　一	
教員養成課程＊	臼　井　智　美	
教養学科＊	山　川　正　信	
教養学科＊	中　野　知　洋	
夜間学部＊	柏　木　賀津子	
学術部学術連携課長事務取扱	上古殿　宜　博	学長指名　～9 月 30 日
学術部学術連携課長＊	森　下　直　也	学長指名　10 月 1 日～

＊任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 27 年度国際交流委員会委員名簿

	氏　　名	備　　考
副学長	向　井　康比己	委員長
国際センター長	高　橋　　登	副委員長
国際センター　専任教員	長谷川　ユ　リ	国際教育部門
国際センター　専任教員	城　地　　茂	国際事業部門
国際センター　専任教員	赤　木　登　代	国際事業部門
国際センター　専任教員	中　山　あおい	国際教育部門
国際センター　専任教員	若　生　正　和	国際教育部門
国際センター兼任教員	松　本　マスミ	
国際センター兼任教員	水　野　治　久	
教員養成課程＊	橋　本　健　一	
教員養成課程＊	臼　井　智　美	
教養学科＊	松　本　鉄　也	

教養学科＊	中　野　知　洋	
夜間学部＊	田　中　俊　弥	
大学院連合教職実践研究科＊	柏　木　賀津子	
学術部学術連携課長＊	森　下　直　也	

＊任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 26 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿

所　属　等	氏　　名	備　　考
国際センター長	伊　藤　敏　雄	委員長　社会科教育講座
国際センター（国際教育）	若　生　正　和	国際センター
	水　野　治　久	学校教育講座
	橋　本　健　一	英語教育講座

任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 27 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿

所　属　等	氏　　名	備　　考
国際センター長	高　橋　　登	委員長　学校教育講座
国際センター（国際教育）	長谷川　ユ　リ	国際センター
	水　野　治　久	学校教育講座
	橋　本　健　一	英語教育講座

任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 26 年度留学生推薦選考会議名簿

所　属　等	氏　　名	備　　考
国際センター長	伊　藤　敏　雄	委員長　社会科教育講座
国際センター（国際教育）	長谷川　ユ　リ	国際センター
	松　本　マスミ	欧米言語文化講座
	中　野　知　洋	日本アジア言語文化講座

＊任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 27 年度留学生推薦選考会議名簿

所　属　等	氏　　名	備　　考
国際センター長	高　橋　　登	委員長
国際センター（国際教育）	長谷川　ユ　リ	国際センター
	松　本　マスミ	欧米言語文化講座
	中　野　知　洋	日本アジア言語文化講座

＊任期：平成 26 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日

平成 26 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿

担当言語	氏　　名	所　　属
英　　語	松　本　マスミ	欧米言語文化講座
中 国 語	中　野　知　洋	日本アジア言語文化講座
ドイツ語	赤　木　登　代	国際センター（国際事業）
韓 国 語	若　生　正　和	国際センター（国際教育）
フランス 語	井　上　直　子	欧米言語文化講座

平成 27 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿

担当言語	氏　　名	所　　属
英　　語	松　本　マスミ	欧米言語文化講座
中 国 語	中　野　知　洋	日本アジア言語文化講座
ドイツ語	赤　木　登　代	国際センター（国際事業）
韓 国 語	小　林　和　美	社会科教育講座
フランス 語	井　上　直　子	欧米言語文化講座

編　集　後　記

昨今、「グローバル化」という言葉を大学教育の場でも口にすることが増えてきました。しかも、従来の留学生受け入れと日本人の海外派遣とに分けて考えるのではなく、留学生と日本人が一緒に学ぶ「協働学習」に注目が集まっています。

最近の留学生で日本に興味を持っている人のほとんどが、日本のポップカルチャー、すなわちアニメや漫画、そしてゲーム等をきっかけとしています。ただ、その動機は何であれ、「日本が大好き」という気持ちを大切にし、留学が終わる際に「ああ、日本で学べて良かった」と思ってもらえるような活動を心がけたいと考えています。

逆に日本の学生は、「内向き」と言われ、なかなか外国に出ようとしません。その理由としては「海外に関心がない、便利で快適な日本に十分に満足」「卒業が遅れてしまうと就職に障る」「留学するお金が工面できない」「英語が苦手なので、無理」そして「海外に行くのは危険」等、さまざまです。確かに、留学はたいへんです。語学力だけの問題ではなく、自分からアクションを起こし、日々押し寄せる課題をひとつひとつ解決していかなければならない状況になります。声をあげなければ、日本にいるときのように「何かを察して」くれることもなく、誰も助けてはくれません。でも、たいへんなことこそ、解決できたときの喜びはいっそう大きなものがあります。そうして、日本ではありえない苦難や同時に日本では得られなかった達成感の繰り返しの中で、学生はたった一年で別人のように大きく成長して帰ってきてくれます。そんな顔を見るのを期待しつつ、学生の送り出しを続けていきたいと思います。

日々の業務にまぎれ、またしてもご報告が遅れてしまいました。前回に続き、2014 年、2015 年と 2 年分の活動報告をさせていただきます。

末筆になりますが、平成 27 年 3 月付で共に国際センターで働いてきた若生正和准教授が同志社大学に転出されました。今後のご活躍をお祈りいたしております。

2016 年 2 月 29 日

（赤木　記）

次号原稿募集

本年報は、留学生教育や国際交流についての多様な考え方や意見を幅広く取り上げていくために企画したものです。次の要領で投稿を募集いたします。お問い合わせは国際センターまでお願いいたします。

枚　数：論　文　10 枚程度（ワード、40 字×36 行）
　　その他　2 枚～7 枚

（原稿のファイルと印字した原稿を頂ければ幸いです。）

2016 年 3 月 31 日　印刷
2016 年 3 月 31 日　発行

大阪教育大学国際センター年報　第 20 号
Bulletin of Osaka Kyoiku University
International Center No.20

編集兼発行者
大阪教育大学国際センター
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1
電話（072)978-3299, 3300
印刷所
カ　ツ　ヤ　マ　印　刷
〒543-0044 大阪市天王寺区国分町 5-1
電話（06)6771-1000